

NO. 70
SUMMER
1980

英語展望

ELEC BULLETIN

特集：新しい英語学習指導



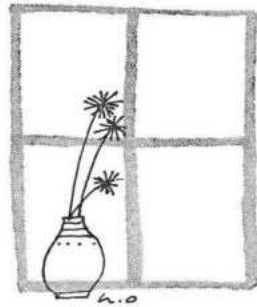
ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL

英語展望

No. 70
SUMMER
1980

ELEC BULLETIN

Edited by Natsuo Shumuta and Akira Ota
The English Language Education Council, Inc.
3-8, Jimbocho, Kanda, Chiyoda-ku, Tokyo



【特集】新しい英語学習指導

座談会：日本で生まれた英語教授法……………太田 朗・
伊藤健三・下村勇三郎・伊藤元雄・渡辺益好・串原国穂 6

【国際展望】

忘れられた前提……………村田聖明 2
The Pains and Pleasures of English ……Eugene Langston 4
新教材論：Notional Syllabus が意味するもの……………石田雅近 20

【連載】

アメリカの人種と民族(Ⅰ)……………國弘正雄 13
漱石のロンドン(その6)……………伊村元道 22
アメリカン・フォークロア(3)……………倉田好子 26
Native Americans 9: Tradition and Modernity Among
Contemporary Native Americans……………Donald D. Stull 29
日常英語の常識 2: Emily Post……………矢野文雄 36

【英語教育の情報と資料 11】

外国語学習の環境……………大塚達雄 38

【E.T.F. ダイジェスト 2】

Pretensive から Expressive へ……………瀬川俊一 42

【新刊書評】『モザイク社会の女性たち』……………吉田健正 43

A Hundred More Japanese Things……………John G. Bradshaw 44

新刊紹介……………45

新刊案内……………47

展望通信……………48

表紙デザイン

太田英男



忘れられた前提

村 田 聖 明

いささか傍観者の態度で物を言うことを許されるならば、日本人と英語とのかかわり合いについてなされている多くの議論が、基本的な前提を飛び越えて、それらの前提についての合意のあるなし、あるいはその当否を無視して行なわれているように見える。

つまり根本を無視した末梢の論議である、といえば、これは言い過ぎであろうか。

例えば、何故われわれは英語を学ぶのか、あるいは、学ぶべき理由があるとすればそれはどういう種類の英語であるべきか、などという、最も根本的な問題が、真剣に討議され、充分に答えられたのだろうか。

さらに、もし日本人が英語に通じなければいけないという説得力ある理由があるならば、それは日本人のすべてにあてはまるものなのか、あるいは、特定の種類の日本人、または一定の割合の日本人にのみ適応するものなのか。

こういう問題の解答がはっきりせず、あるいは合意も得られないままに、「日本人は何故こんなに英語が下手なのだろう」とか、「こうすれば誰でも、明日から英語がしゃべれるようになる」などというたぐいの議論が巷に溢れている。

そして同時に、年若い国民はこの未解答の問題のために多大の時間と財力と精力を費やしているのだ。

「日本人は何故こんなに英語が下手なのだろう」と誰かが言ったとしよう。それが、平均よりは少しましな英語の駆使力を持った日本人、あるいは英語を母国語とする外国人であっても、これを否定したり、あるいはこの言明の不当性をなじる日本人が何人いるだろうか。それは、「日本人は間違いなく英語が下手なのだ。いくら批判されてもしかたがない」というのが「常識」になっているといえるのではないか。

ところが実は、こういう誤った前提こそ、問い直されなければならないと私は思う。

たしかに「日本人は英語が下手だ」ということは一般論としていえるかも知れない。しかしここで大事なことは、「それがどうした？」と聞き返すことである。

日本人が英語が下手であるということは少しも不思議ではない。それはアメリカ人やフランス人や、フィンランド人が日本語ができないことと同様に不思議ではないのだ。

いわゆる「国際的」日本人がよく口にするのは、「ヨーロッパのインテリは二つ三つの外国語を自由に話す。しかし日本のインテリは英語もロクに話せない」という種類のことである。これなども、当然考慮に入れるべき前提を全く無視した暴論としか言いようがない。

この文脈でいう「ヨーロッパのインテリ」とは例えば、ドイツ人、オランダ人、ベルギー人などであろう。少なくともフランス人にはあてはまらないし、イギリス人にも無理であろう。それはフランス人やイギリス人の外国語を学ぶ能力が特に劣っているというのではない。かれらは自国語以外の言語を学ぶ必要を認めなかったに過ぎない。

反面、たとえばオランダ人にとっては、外国語を習得せずに外国人とつきあうのは極めて不便である。そして彼にとってドイツ語や英語や、あるいはさらにフランス語やイタリア語も習得するのはそれほどむづかしいことではない。オランダ人にとっての英語やドイツ語は、東京人にとっての青森弁や鹿児島弁より、遙かにやさしい言語である。

その意味では日本人でもアッという間に習得できる外国語もあるのだが、これを習得しようとする日本人の数は極めて少ない。もしこの外国語を中学校から高校に到るまで必須科目として教えれば、圧倒的多数の日本人は少なくとも一つの外国語についてはヨーロッパのインテリ並みの語学力を誇示できることになるろう。その外国語とはいってもなく、韓国語（あるいは朝鮮語）であ

る。

日本語とは縁もゆかりもない、従って習得することは途方もなくむずかしい外国語、すなわち英語に通曉しようとしてラチがあかず、わけもなく自分は語学の劣等生だと思いつんでいっているのが日本人だといえようか。

それでも、英語力を少しでも高めようという努力は怠らず、何か能率的な方法がないかと常に探し求める。

いまま上に用いた「英語力」というようなことばについても、その内容についての合意は乏しいように見える。あるいは、今あると見られている合意も、重大な前提を除外しているかも知れない。

わが国では、少なくとも戦後においては、例えば「彼は語学ができる」とか、「彼の語学力を駆使して…」などという時の「語学」ということばは「英語の会話力」という極めて限られた意味で用いられている。

今さらいうまでもないが、死語や未開種族の言語以外の言語にはすべて音声と文字という2つの媒体があり、しかもそのどちらが他方よりも重要であるということとはできない。

ある特定の種類の状況においては確かに、音声と媒体とする言語——話しことば——の方が、文字と媒体とする言語——書きことば——より便利である。あるいは、さらに限られた状況、たとえば真つ暗闇の中、においては話しことばを用いずには通信は行なえない。

しかし別の状況では書きことばの方が遙かに重要である。たとえば、多数の人間に情報を与えるのには文字による通信の方が遙かに容易である。さらに、書きことばの最大の利点の一つは、情報を受けとる側が、受信を自分の好きな時に行なえるということであろう。新聞雑誌、書籍に詰め込まれた情報は随時にとり出すことができる。この便利さと能率の良さは音声媒体の比ではない。

書きことばのさらにもう一つの重要な特質は、情報の文字化の過程には話しことばに較べて充分な時間があるのが通例であるから、内容の正確度が高いということである。

これに較べると話しことばは遙かに不正確である。情報を提供する側も、即興的に文を作るのであるから表現が適切でなかったり、間違いがあったりすることが多く、時には重大な問題も惹き起こしかねない。政治家や外交官の発言について「あの時ああ言った」とか「いや言わなかった」となどという騒ぎが起きるわけである。

話しことばと書きことばについても一つ大事なことが往々にして見失われている。それは、話しことばにおいては構文が不正確でも、時には文でなく、単語を一つ用

いるだけでも通信は行なわれるということである。これは、話しことばが用いられるのは通常、特定の個人が特定の個人（単数または複数）に対し地球表面上のある特定の場所で、ある特定の時間に行なわれるために、状況が極めて具体的であるからだ。例えば一つの単語（restaurant, police, hotel など）が用いられても、話す人間を包む具体的状況とか、さらにその表情、動作などの助けによって通信が完成され易いのである。

従って、話しことばだけに長じる人は正確な構文力が発達しないというおそれがある。話しことばにおいて要求される文の正確度は、書きことばの場合の何分の一か以下である。

「英語力」を高めるにはどうしたらよいか、という問題について屢々議論されるのは、日本人の場合、何歳で始めるのがよいかということである。一般には「早いほどよい」というような印象が広まっているようだ。これは、「母国語は乳児の時から学び始める。そしてそうすれば文法などの知識はいらない」となどという非科学的な議論に裏打ちされている。これなどもいろいろな前提を無視した暴論のたぐいであるといえよう。

日本人が身につけたい、あるいは身につけることが望ましいと考えられる英語力というものは、日本に居住して正常な社会生活を営む日本人についての話である。日本という地理的範囲の中に住んではいても、一般日本人とは隔絶した社会生活を営み、一般日本人と同等の言語活動（日本語の読み書き話し）ができなくてもよいという前提に基づくものではないはずだ。

この意味で非常に示唆に富んでいると思われるのは本誌春季号（No.69）の有元将剛氏による「外国語学習開始の時期」で紹介されている Diller 氏の研究である。この研究によれば人間の外国語習得能力は例えば50歳の成人よりも12歳の子供の方が多く持っているというような単純な理論は成り立たないことを示している。

しかしここでも大切なことは、この研究あるいは観察がアメリカという社会的あるいは言語的環境の中で行なわれたということを認識することである。たとえば、文中に見られるアメリカへ移住した家族の例にしても、その家族は日本語ではなく、ヨーロッパ語の一つを話す家族であろう。ここでも日本語と英語との関係という特殊な要因を忘れて論議を進めることはできない。

再吟味をすべき前提は他にまだ沢山あるが、この限られた紙面では以上のような二、三の例に止めたい。専門家の考慮を促すことになれば望外の幸いである。

（ジャパントイムズ主幹）



THE PAINS AND PLEASURES OF ENGLISH

Eugene Langston

Accidents of history have made English the international language of our time—and much suffering has thereby been added to the lives of countless school boys and girls, their teachers, and many other blameless people. Doubtless any language that had to serve so many people in so many ways would be found wanting; and though choosing a language better suited to international needs would be hard, probably no rational being would elect English for the job. For despite its many merits, the difficulties of English for the native speaker are awful, and for those who must learn it as a foreign or second language, they are staggering. This is distressing, since in its elementary stages the language seems so eminently simple and even reasonable.

A first difficulty is pronunciation—not because there are any sounds particularly hard to make, but because pronunciation is often so remote from spelling. Indeed, spelling has so little to do with pronunciation that learning to spell decently takes almost as much industry as any Chinese or Japanese must apply to committing to memory a different but hardly less cumbrous system.

Once we reach a degree of control, of course, we awaken to the presence of certain phonetic elements and clues to pronunciation as well as meaning; and just as the student of Chinese or Japanese perceives that certain elements of logograms or characters indicate

identical or similar sounds whenever they occur, the student of English finds that certain clumps of letters with the same arrangement have identical or related meaning, and often identical or similar pronunciation.

The word orthography, a fancy word for spelling, may illustrate. The ortho- part occurs in such familiar words as orthodox and orthodoxy, orthodontic and orthodontics, orthopedic and orthopedics, as well as in numerous other learned words. The meaning regularly is correct or right. The -graphy part is familiar to everybody from such everyday words as biography, photography, telegraphy, and stenography. The meaning of this element regularly is writing or something like writing. And so anyone with a little experience meeting orthography for the first time can with fair assurance guess that it means correct writing, and context will probably trim the meaning to right spelling. But there is nothing to warn us that unlike the other ortho- this one is going to be pronounced differently, with the stress on the second syllable and the sound of the o itself changed. True, somewhere distant in the ear an echo of the stress shape of photography and the other -graphy words might give a clue, and the clue would be a sound one.

English is a lovely forest, set at every turn with pitfalls and traps like this. If one knows enough, it is easy enough to skirt them—but there's the rub: it takes a long time to

know enough. Actually, I suspect that real control of any language, perhaps even the simplest, may take more years than it is comfortable to think about, since few of us are like those people whose gift of mimicry and memory enables them truly to master not just one but several tongues in relatively little time.

For most of us mortals, though, the pains of language-learning are long-drawn. Getting ready to read Milton, say, with any pleasure is a mountainous task. But there are less craggy writers, and the woods of English are full of pleasant glens, lively brooks, lakes and fens, sunny clearings, springs, rocks and hills, open prospects, dank hollows and mysterious caves, silences and sounds, joyous and somber birds, chattering creatures, fleet runners, noiseless creepers, and people. The riches are there for the taking, and the student does well to finish his homework and then rush to the woods to read and listen to and make his own whatever gives him pleasure.

It is not easy to find much enjoyment at first, maybe; but everyone has some interest in something, and the knowledge and stimulus of such an interest are the start, an easy and familiar path leading into the deeper woods. The important thing is to start, reading as though reading one's native language without a dictionary, the material itself being the guide to meaning. This is where starting with something familiar is a help. Then reading aloud is a further help, being careful to read in such a way that the meaning would be clear to someone listening. Doing this exercises the tongue and trains the ear: the tongue learns to say things right, and the ear to detect that they are right. And sometimes it is worth taking time to learn by heart anything one particularly likes.

Listening is important too. There are fine recordings of stories, plays, musicals, essays, poetry by good actors and readers. Their

use of language, pronunciation, phrasing, and expression provide good models to imitate. At first hearing, much will pass one by, but careful listening and actual parroting will presently make what is being said apparent. This helps correct mistakes of pronunciation, sharpens the ear, makes the tongue work easier, and thus makes it easier to talk naturally and expressively.

Reading aloud, memorizing, and imitating are helpful because they make reading and listening active, rather than passive, experience. They help us to the next stages of talking and writing. For a long time we are children and we do not understand all that is going on around us; we try to talk and don't get through; if we are lucky, someone helps by telling us how to say what we are trying to say. We say funny things and are often misunderstood. But all these false starts and missteps are part of the process of taming words to our needs; for words are an unruly lot, and we have to learn their perverse ways if we are to understand them and make them serve our wants and needs.

The major problem in language-learning perhaps is production—speaking and writing. One reason we learn so much in school is that we are constantly forced to produce, to recite, and our study is thus reinforced, for if we can recite, then for a time at least we have made what we have studied our own. But when we are not in school, we lack this stimulus and requirement. This is why reading aloud, memorization, and imitation are helps. Lacking the guidance of a teacher or friend, we miss the help of correction, and so we have to correct ourselves.

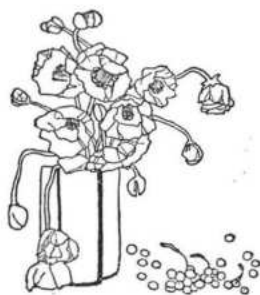
It is at this stage that the dictionary may help. It will tell us how to pronounce and it can remedy our misunderstanding or misuse of words. It should not be used much as an aid to reading, for context will often tell us more fruitfully what a word means than

(Continued on p.28)

〔座談会〕

日本で生まれた英語教授法

ELEC 教材・教授法研究グループ



太田 朗 (上智大学教授)

伊藤 健三 (立教大学教授)

下村勇三郎 (東京学芸大付属竹早中学校教諭)

伊藤 元雄 (横浜市立桜丘高校教諭)

渡辺 益好 (埼玉大学助教授)

(司会) 串原 国穂 (ELEC 出版部長)

研究グループ発足の趣旨と研究姿勢

串原 本日は、お忙しいところ、お集まりいただきありがとうございます。

1976年4月からこの研究グループが発足しておりまして、4年間研究を続けて、やっと中学校と高等学校の英語学習指導法の研究を終えてここに発表する段階になり、まことにおめでたいわけでございます。

初めにこの研究グループの委員長でいらっしゃる太田先生から研究グループの発足のときの趣旨、あるいは研究の姿勢などについてお話しいただければありがたいと思います。

太田 4年間たいへん努力していただいておりますので、りっぱな成果があげられたものと非常に感謝しております。

ELEC の重要な仕事は、英語科教員の再教育、英語教育に関する指導助言、information center としての機能を果たすことなど、幾つかあるわけですが、ELEC 創立20周年の記念事業として、この教材・教授法研究グループと、評価研究グループ、それから information center としての機能を果たすための資料・情報の収集および分析研究グループと、その3つの研究グループを発足させたわけですが、その中で教材・教授法研究グループというのは非常な成果をあげたように思われます。

その発足のときの幾つかの基本的な考え方をいいます

と、1つは理想案ではなくて、現在置かれている状況の中でどうしたらよりよい英語教育が行なわれるようになるだろうかという現実的なプランを作成するということ。

それから ELEC の発足当時は、いわゆる Audio-Lingual Approach といいますか、Oral Approach といいますか、そういう教授法が全盛の時代であって、Fries とか Lado とか、そういう人たちを advisor として発足したものですから、その伝統が、ずっと ELEC の教授法の中に流れてきているわけです。そこでそういう過去の研究成果を踏まえてということがもう一つあったように思います。

その後、ご承知のように、Audio-Lingual Approach の理論的な基礎になっていたアメリカ構造言語学というものについて、変形文法以来幾つか重要な疑問が提出され、教師および教授法を研究する人たち自身も、一定の視点というものを失いかけていたということがあったわけですが、やはり過去の研究成果を踏まえた上で、必要な修正を加えながら、より良い教授法を研究していこうというねらいもあったように思います。

それから3番目は、最初に申し上げたように他の2つの研究グループ、その後 audio-visual に関する研究グループも発足しましたが、そういうほかの研究グループの成果と、できれば連係を保ちながらやっていったほうが良いということ。これはほかの研究グループの進捗の度合いとも関連するわけで、なかなかむずかしいことですが、発足当時はそういうことも考えられて

おったわけです。

それから4番目として、これは ELEC でこういうことをやる場合の非常な利点の一つですが、いわゆる Summer Program で実験をし、かつ現場の先生方の意見をできるだけ吸収して、それをフィードバックしてわれ



太田 朗氏

われの研究を進めていく、というような幾つかのことを念頭に置いて発足したように思います。

串原 ありがとうございます。それでは実際の研究の方法に関して伊藤健三先生お願いいたします。

アンケート調査結果の考察

伊藤(健) Oral Approach の考え方が、少なくとも入門期の指導できわめて有効であることは、いろいろなデータで実証されていると思うのです。ただ、Fries や Lado がいうような Oral Approach の行き方がそのまま日本の現場に受入れられるかどうかについては、かなり批判もあったので、いろいろな方のご意見をうかがいながら従来 ELEC で提唱していた Oral Approach の指導課程に検討を加え、そして日本の特に中学校教育での英語教育のことを考えていきたい、ということで研究を進めてきました。

ところが途中で高等学校の問題が起きてきて、この考え方は高等学校の初年級の場合にも適用できる、というよりは適用しなければいけないのではないかということ、高等学校の初年級の場合についても考えようということになったわけです。

ただここに teaching procedure を示すにしても、非常にきっちりと弾力性のないものでは困るということで、多分に弾力性を持たせるということを考えながら、teaching procedure を中心に考えてきました。

串原 ありがとうございます。太田先生のお話にあった、現実的なプランをということで、アンケート調査をし、Oral Approach を現場の先生方がどういうふう理解し、解釈しているだろうかという意識調査をしたかと思うのですが、その辺のことからお話いただければと思います。

伊藤(健) きわめて概括的に申し上げれば、まず最初

に、主として ELEC 同友会の会員諸君にご協力をいただいて、Oral Approach をどう理解し、また実践面でどう評価しておられるかをアンケートにより調査し、その結果について考察をしていくのが手始めなんです。

その次に、まずたたき台ともいっていい中学校用の特に読解教材を扱う teaching procedure を考えて、78年の Summer Program の参加者およびその advisor の皆様のご協力を得て、いろいろと検討を加えていただいた。翌79年にも同じことをやってきた。そしてその結果を踏まえて、一応まとめてみたわけです。

串原 アンケートをしてみて、予想したもの集計したものかなり食い違いもあったように思うのですが、その辺のところはいかがでしょう。

渡辺 アンケートの項目がたくさんあったわけですが、Oral Approach の理論的な面を誤解している人がかなり多く、また、こまかい項目についても解答が非常に予想と違っていたところもたくさんあるわけです。中でも Oral Approach は会話力の養成が大きなねらいであるというようなとらえ方をされている方が、非常に多いというのが強い印象として残っております。

下村 アンケートの結果、ずいぶん誤解しているなということを見出し、従来の ELEC の Summer Program でやってきた teaching procedure について、再検討してみる必要があるのではないかというのが、具体的に中学校の指導課程を検討するきっかけになったのではないかという気がするのです。

伊藤(元) Oral Approach というものは大へん不思議な力があつたような気がします。一度この方法を会得し、実践してみると、徹底的にそれを信奉するという傾向がある。そのために、示された procedure は唯一無二のもので、そのまま型通りに追求していこうとするわけです。

もっとも、指導効果をあげるためにはそのくらいの信念が必要であらうと思いますが、実際は、そんな rigid なものではなく、ある程度の flexibility があつたはずで、これをどう procedure の中で位置づけられるかということを考えました。

また、もうひとつ現実の問題として、入試との関係で、果たして oral mastery ということが効果があるかどうかという不安があつたと思われます。入門期では有効であるが、学年が進むにつれて reading と writing の面での不安感と焦燥感のようなものが漠然と抱かれていたようです。

伊藤(健) たしかに Oral Approach というのは指導課程そのものが非常に rigid なものととられていた。あ

るいはそれは ELEC 自身にも反省すべき点があったとも思いますね。

下村 それともう一つは、高校の学習指導を考えようというのと、中高の指導要領の改定の時期がぶつかったということとは時宜を得た、と私は思うのですけれ



伊藤健三氏

ども。近い将来、高等学校の1年では、現在の中学校の3年生ぐらいの内容が扱われるであろうと思われます。となれば、高校においても oral work をもっと重視しなければならないのではないか、ということから高校の teaching procedure の研究に手をつけたといえるのではないかと思います。

伊藤(元) 高校に Oral Approach をとり入れることは、従来から行なわれてはいましたが、それは高校生という精神発達段階ではやや無理があるのを承知であったということです。そして、中学校での指導経験のある方や、ことばの教育の在り方を本質的に考えておられる高校の先生方の間では正しい高校英語教育の方向を自分なりに模索し、四技能の調和のとれた方法を試みられてはいます。

しかし、現実には、3か年を通して reading と writing とが中心になり、読本、作文、文法という3本柱で分けて指導されているために、総合英語の指導法については研究は進められていないのが実状でしょう。

上の方ばかり眼を向けていた高校の先生に下の方の中学校へ関心を向けるきっかけとなった「英語I」は、その意味で大きな力があったし、この procedure がその連携を重視していることも時宜を得たものと言えます。

伊藤(健) Summer Program の受講生、つまり先生方の中に大体半数ぐらい高校の先生がおられたのです。その先生方がこんなすばらしい指導法があったのかということ、だいたい啓蒙されて帰られたのではないかと思います。

伊藤(元) そのとおりですね。それは一口にいえば音声欠如の英語指導から、音声をも多分に取入れた本来のことばの指導というものに戻ろうとする大きなきっかけを得て帰られた、そんな気がしますね。

伊藤(健) たしかにいまお2人がおっしゃったように、教育課程の改定によって、それ以前からいわれていた中

学から高校へ移る際の断層を埋めるにはどうしたらいいかという、指導過程の一例を示せたのではないかと思います。

伊藤(元) 優れた指導法というものは、それに適合した言語理論と心理学的な裏付けが無ければならないのですが、それらと同じくらい大切なことは、現場の教師が経験を問わず実践しやすいことであろうと思います。

“実践しやすい”という意味はいろいろと解釈できますが、ひとつは多様化に応ずるだけの柔軟性があるということと、指導する教師に極端な疲労を与えないということではないでしょうか。とにかく、理論が先走りしがちな指導法に力強い安定感と肉付けが得られたのは、現場の先生方の率直なご意見と協力があったからだだと思います。

伊藤(健) 78年と79年とではかなり procedure がこまかいところで変わってきていますね。これもほんとうに Summer Program を中心にした trial のおかげですね。

Language Use Practice の導入

串原 『新しい英語学習指導』という書名で、今回4年間にわたる研究成果が発表されるわけですが、この内容のご紹介をいただければと思いますが、伊藤先生から。

伊藤(健) では全般的なことで申しますと、初めは中学2,3年向けと高校1年向けの teaching procedure だけを発表しようかというので進んできたのですけれども、アンケートの結果等をいろいろ考えてみると、やはり Oral Approach の考え方の基本を正しく認識してもらうという意味で、日本の従来の教授法の流れの中で、Oral Approach の考え方がどういうふう位置づけられるのか、また将来どういうふうになっていくかといったことを書いたり、Oral Approach の基礎になっている言語学的な理論について、一応このくらいは心がけておくというのではないかと思います。Oral Approach という指導法の特徴などをなるべくわかりやすく解説の意味で書いてみました。

また Oral Approach に対する批判の中の幾つかを取り上げて、その受けとめ方を述べ、そして本来の中学校・高等学校におけるそれぞれの学習指導の procedure を、中2、中3、高1あたりのところについて、詳しく、例を示しながら解説しました。

串原 そこで具体的に中学校の英語学習指導が、どういうふうに変ってきたのかというような、特徴的なところをお話いただければありがたいと思います。

下村 まず teaching procedure の skeleton についてちょっと触れてみたいと思います。今回発表した procedure にも review から始まって presentaion, consolidation という流れはありますけれども、細部にわたる項目、それからその順序というものは、実際は生徒を相手にして指導してみた結果をもとにして、何度も何度も吟味しながら改善を加えてでき上がったものであるということなんです。それだけに一つ一つの項目、一つ一つの流れには、それなりの意義のあるものだと思っております。そこをところをまず理解してほしいということがありますね。

それから review の指導過程は、中学校の場合、週3時間に対処できる内容であると思うのです。

従来 pattern practice というものが誤解されている面もあって批判的になってきたということがいえるのですが、英語教育で、表現力を育成するために言語活動を行うとかいいますが、その基本になるのは pattern practice であって、決してないがしろにはできないと思います。そこで procedure ではやさしい段階から、徐々に生徒の表現力を高めるまでの step を踏んで組み立てられています。このことは復習段階の大きな特徴になっていると思っております。

串原 特に従来と異なった点は language use practice というのが入ってきたことだと思います。その点はどうか。

下村 復習では、前時で学習した内容を聞いてみることから始まって reading, oral practice へといくわけですが、その中で pattern practice を行なって、その上で実際の運用につながるような活動も行ないたいということから、新しくそこに language use practice というものを入れたわけです。そのやり方については題材、内容に応じてどういうことが行なえるかということをはかなり具体的にこまかく述べたつもりです。

伊藤(健) その language use practice というのは Oral Approach に対する批判で、pattern を中心にした指導と、学習指導要領でいう言語活動の指導とどういうふうに関係があるか、関係がないのかといったことがよくいわれるので、それに対する一つの具体的な回答だと思えますね。

主体的学習作業としての Silent Reading

串原 Presentation のほうに入って非常に大きく変わったのは、reading のところではないかという気がするのですが、渡辺先生いかがでしょう。



下村勇三郎氏

渡辺 Presentation の中で reading の扱い方がたいへん変わったのですが、oral introductionのあとの扱い方が若干変わってきているというところからお話したいと思います。

従来ですと oral introduction で導入した target があ

って、それを聞いてすぐ mim-mem に入っていたわけですが、やはりある特定の、たとえば1つの例文だけを mim-mem していくというのではなくて、その前に類型といいますか、同じ sentence pattern を持ったいろいろな situation、いろいろな意味をあらわす英文を聞いて文型を一般化した上で、その中の特定の例文について mim-mem をやっていく。もちろんそれが aural drill なんです。これを mim-mem の前に位置づけた。これも非常に意義の深いことだろうと思います。

それから reading についてですが、“読む”ということはどういうことかということからいろいろな検討を加えたわけです。

まず内容把握というものをより確実なものにしようということで、silent reading を冒頭にもってきて、生徒たちはそこに書かれている新しい教材の内容を問題解決という形で、とにかく自分の力で主体的に内容把握の作業をやる。そしてそういう基盤の上に先生が model reading を行なう。それによって silent reading をした際の自分の読みを確認したり、また誤って理解していたようなところも自分で気づいてもらいたい、また気づくのではないだろうか。そういう作業のあとに意味をふまえた音読を中心とする作業をやるというふうな step をとったわけです。

ですから reading を大きく2つに分けてまず最初に reading for comprehension、つまり理解のための読みをやった上で、それを基盤にした reading aloud with comprehension、そういう step をとっていったというわけです。

それからもう一つは、reading をしたあとの処理の問題ですけれども、教科書の内容を読んだあと、何かそこで口頭練習をし、一層確実にしておくべきものが非常に多いのではないかとということで、reading のあとというか、その中に含まれるといってもいいのかもしれませんが

けれども、oral practice というものを入れたわけです。

この中に含まれるものとしては pattern practice と language use practice で、これは step としては review の中にありました oral practice と全く同じなんです。



伊藤元雄氏

oral practice を通して、読んだ内容を再確認するという点で、presentation したあとの処理がだいぶ改善されたというように思います。

下村 特に、従来の Oral Approach という、生徒が声を出して練習する、読むということはきわめて多かったような気がしますけれども、今度の場合、生徒がただ先生のまねをしているとか指示に従って何かをいうとかいうことだけではなくて、自分の意志で内容を読み取る、そういう場面もなければいけないのではないかと思います。これが特徴的なことだと私は思います。これは Summer Program なんかで実験して受講生の中からは意外だという驚きもあったと同時に、いいことだというふうに感心した方もけっこうおられたと思いますね。

渡辺 そうですね、生徒が主体的に考えるチャンスがかなりふえたように思います。

伊藤(健) 要するにこれも Oral Approach に対する一つの批判だったのですが、読解力の養成ということについてかなり不安を持っている。それに答えたといっているかと思っています。

渡辺 最後に consolidation の段階に関してですが、従来ともするとクッションみたいな形で、時間がなければやらなくていいんだみたいな考えもあったのです。しかしやはり consolidation というのはその時間のまとめでもあるし、その時間に何をやったのかというのを生徒たちにしっかりとつかんでもらいたいということで、はっきりと位置づけたということが変わった点ではないかと思っています。

中高の連携と音声への回帰

串原 つぎに高等学校の学習指導のほうに入っていきたいと思います。いままで高等学校の teaching procedure というのはあまり発表されていないと思いますが、

それだけに、かなり抱負もあろうかと思いますが、伊藤先生お願いします。

伊藤(元) 高校用の teaching procedure では教材の種類や内容とか、hearing と speaking に対して、reading と writing をどう対応させるのかというようなことが大へん難しいと思います。そして学年が進むにつれて大体読解が中心となり1時間の授業過程の中で、どうしても語彙や構文を理解させるための説明が多くなってきます。そこで当然のことながら、英語を運用するための時間をとることが少なくなってくることになります。

こうした実状をふまえたうえで、高校での Oral Approach は如何にあるべきかを考えましたが、Oral Approach の principle は貫きたい、つまり、oral work は欠かすことができないということです。しかし、高校では生徒の発達段階や多様化、さらに教科書の問題、先生方が今までやってこられた指導法などを考慮して、中学校と同じというわけにはいきません。そこで、今回は主として、第1学年を対象とした考え方で進めました。

この procedure には大きな柱が大体3つあると思います。最初に、中高の連携ということ、2番目に、音声はどうとり入れるか、そして3番目に、文法訳読方式からの脱却ということです。

第1の中高の連携ということについては、今回の指導要領の改定においても重点的に唱えられています。言うは易く行なうは難しいことで、意識が先行し実践のプログラムが追いつかない状態であったと思います。入門期と基礎を受け持つ中学校と、発展段階にある高校では、指導する先生方の間で英語教育観に多少のずれがあるのもやむを得ないことですが、この procedure では、基本的な理念と方向性においては一本化されてきているということです。

第2の音声の問題はもっとも大切なことであり、高校における多くの消極的な条件を、どう積極化するかということでした。aural-oral work を多用し、practice を重視すれば comprehension に不安を来し、読解力の面で不足する。また文字を見てそれを直ぐに意味と結びつける作業に慣れている場合には oral work そのものの方法もと入れやすいものにしなければならない。しかも、抽象的な論理操作にやや興味を感じ始めている高校生に、思考力を働かせながら音声を多用させることは、具体的にはかなり困難なことです。この点でもっとも苦心したと言えるでしょう。

それから、第3に日本語をどう利用するか、ということが最後まで問題になりました。Oral Approach では

日本語は使用してはいけいではなく、理解させるために必要ならば差しつかえないわけですが、日本語での思考力が定着してしまっている高校生の場合、reading comprehension に重点が置かれてくるにつれて、日本語の介在は欠かせないものなのでしょう。問題は、その日本語を如何に用いるか、ということです。

とにかく全訳は避け、できるだけ paragraph reading の形式をとり、key sentences や important sentences を、内容と構造上から発見させるようにし、それだけを日本語で確認することによって全文を理解する方法がとられています。つまり、analysis から analogy へと思考法を転換させることです。

以上の3つの点の他に、予習の問題があります。中学校では復習を中心に家庭学習が行なわれるのが普通ですが、高校では予習を前提とした授業形態が多いので、家庭で予習する場合の指導も必要であるということです。特に、低学力の生徒の場合には、学習に興味をもたせ、意欲を起こさせるためには、主体的に取り組む姿勢をつけてやるのが大切です。こうした意味で、preparatory sheet を用いて、家庭学習と教室学習を一つの学習サイクルにした具体的な方法を示したわけです。

今回の teaching procedure の枠組は、一見したところでは、中学校と同じものですが、内容と扱い方においては大きな違いがあります。しかし、Oral Approach の基本的な理念と具体的な技術上の手法はそのまま利用することになりますから、中学校の解説を十分に理解してから、高校の procedure を利用していただきたいと思います。

串原 ありがとうございます。何かほかの先生方でもつけ加えることございますか。

伊藤(健) 高等学校の場合、われわれは初年級のところを主として考え、高校全般について考える余裕がありませんでした。

ただ中高のギャップを、現実にはいかにして埋めるか、という具体案が示されたのではないかと私は思っています。

入試にも有効な Oral Approach

太田 初めのころ、特に高等学校あたりになっていくと入学試験が非常に大きな問題になってきて、それで Oral Approach に対して不安を感じるようになるという話がありましたが、Oral Approach による指導を受けたもののほうが、従来のいわゆる訳読式の指導を受けたものよりもむしろ大学入試では、たとえ大学入試に音



渡辺益好氏

声的な面でのテストが入らないにしても有利であるとかいうようなことがいえるのですか。

渡辺 日本の英語教育、特に高等学校の場合一番つけたい力は読解力だろうと思うのです。その読解力をつけるためには、その基盤として

Oral Approach によって oral mastery, つまり基本的な教材を口頭でマスターしておくことだと思います。だから中学校から高校の初年度にかけて Oral Approach に基づいた指導でやるということは、日本の英語教育を考えた場合に、究極的には読解力をつけるということを考えているのだということです。だからほんとうの意味での直読直解という力が大いに発揮されれば、入試もそれほどむずかしくはないのではないかと。だからぼくたちが考えているのは、決して Oral Approach でやっていくと入試に不利であるということにはならないのではないかと、ということをおもっています。

特に高校の場合、口頭練習を一生懸命やると、読解力のほうが時間的に少なくなって、力が落ちてしまうのではないかと一般に言われていますが、口頭練習を読解力に結びつくステップとしてどういうふうにとらえるかという、その辺のところを現場の高等学校の先生たちが主体的にお考えになり、扱っていただけたらたいへんよろしいのではないかとこのように考えます。

伊藤(元) 全くそのとおりだと思います。たとえば具体的なことをいいますと、listening comprehension, これは直感的に音声の意味に結びつけていくという、そういう技能を高める作業だと思いますね。

そうしますとそこに quick response という問題が起こってきます。音声聞いてぱっと意味がつかめるということは、長文読解でも明らかに有効だと思うし、事実わたくしもある程度の効果はあげているわけです。明確なデータはいま手元にはありませんけれども、相当効果があるということとはたしかです。

伊藤(健) いまの大学入試の問題は、大学入試自身がどの程度レベルダウンしていくかという問題で、現実の問題としていま未解決で、いずれも近いうちに決定されなければいけないことなんでしょうけれども、渡辺先生もおっしゃったように、このいき方でいって、大学入試

に不利になるということは、全く考えられないと経験的にもいえると思います。

もう一つは、聴解力と読解力はかなり高い相関関係をもっているということ、これはわれわれのグループだけでなく一般に実践の経験からもいわれていることだし、昔から直聴直解は直読直解につながるということは自明のことのようにいわれている。これは経験的にいってもたしかに否定できないと思うのです。

下村 太田先生のおっしゃったことは、高校入試とも通ずるのです。一時期、Oral Approach をやると高校入試に不利じゃないか、という意見が出たことがあります。しかし、それは、Oral Approach を正しく理解していい指導過程に基づいてやっていなかったから、ということがいえると思うのです。

太田 アンケートの中に Oral Approach は conversation をやるための手段ではないか、そういう誤解がかなりあったような話を承りました。そういうのがあると、もっぱら written test である入試の場合は不利であるというきわめてナイーブな誤解だと思うのですが、それが出てくるおそれがあるわけで……。

渡辺 会話能力の養成だというのが、アンケートで49.2%、しかも ELEC の同友会の人たちのアンケートで半数なんです。だからほんとうに驚きました。

太田 あれはばくも意外だった。Fries は、最終的な目標は何であれ、最初の段階で oral mastery をやるということが有効であるということを知っているわけで……。

日本で生まれた英語教授法

串原 日本の土壌で英語教授法が生まれなければならない時期に来ているということを考えたのが、4年前だったと思うのですが、4年たってほんとうに借りものでなくて、日本の土壌で新しい教授法が生まれたのではないかという気がするのですが、その辺のことにに関して、一言お話しただけだと思います。

伊藤(健) それは、この研究グループの先生方の実践、Summer Program に参加された人たちの実践など、ある地域に片寄ることなく現場の反響、反応を吸収できたということではないかなと思いますね。

太田 そうですね。これはばくも最初にいったのですが、変形文法の出現により構造言語学の理論的な基盤というものについて、疑問が提示されるようになったわけですが、教授法に関して、特に外国語教育に関して、構造言語学以後の言語観がどれだけの implication を持つかということについては、まだ何も定説みたいな

ものが出てない。そのために Oral Approach だけではなくて、外国語教育の教授法そのものに関して、いま相当な混迷があるような気がするのです。

そういう意味で、とにかく過去20年間にわたって、Oral Approach というのは、いろいろな欠陥はあるにしても、相当な成果をあげた。それはもっとさかのぼれば Palmer, Hornby の伝統も継いでいるわけです。その過去の成果を全然ご破算にして何かまるきり新しいものをつくり出そうというのは、これはばくはあまり得策ではないと思いますから、そういう意味で過去の成果を踏まえた上でその欠陥を是正し、もっと実情に即した、やりやすいような方向でものを考えていくといういき方、それで実際に Summer Program なんかにいろいろな意見を徴しながら、堅実な研究をしたということは非常に大きな意義を持つように思います。

ただ1つだけいいたいことは、これは interim report みたいなもので、中間報告ですから、これからおそらくまだまだいろいろと修正し、考え直さなければいけない点が出てくると思います。だからこれからも研究はぜひ続けていってもらいたい。ELEC にも特にお願いしておきたいと思うのです。やっておられる方はたいへんかもしれないけれども、なるべく継続してもっとしっかりしたものにしていていただきたいと、特にお願いしたいのです。

串原 非常に良いお話を承りました。この研究に対しては、外部の大勢の人々が期待しているわけですし、7月20日に出版される『新しい英語学習指導』を楽しみにしたいと思います。

どうも、長時間にわたり有意義なお話をいただき、ありがとうございました。

英語のモデル教案集

ELEC 編 A5判 ¥880

カセットテープ全15巻¥30,000(分売可)

ELEC 英語教育研究大会において行なわれた実演授業の教案集。中学・高校の全学年にわたる模範授業15時間を収録しており、ELEC が永年続けてきた英語授業研究の結晶であり、中学・高校の英語授業の珠玉集ともいえるものである。大学の教科教育法の教材として、また現場教師の参考資料として最適。

ELEC 出版部



アメリカの人種と民族 (I)

國 弘 正 雄

はじめに

編集部のご好意で、アメリカにおける人種と民族につき数回にわたって書かせていただくことになりました。

よろしくお付き合い下さるようお願いいたします。

アメリカが日本とちがひ、複数——それも多数の——人種と民族集団から成る複合国家であることはよく知られています。日本をもって単一人種単一民族単一言語の国であると呼ぶのは、いまでは一種の cliché とすらいえるでしょうが、アメリカがその反対の極に位することはたしかです。

むろん日本とて、その成立の過程を考えれば、政治学者の神島二郎教授がつとに指摘されるように、「馴化」の契機が存在していたこと、そして今日の日本がその結果であることはまちがいありません。

この「馴化」ということばは、make the strange familiar というゴードンのシネクティックスの術語を神島教授が日本語に直されたものです。

要は、複数の異なる存在が時とともに一つのものへとまとまっていく過程を重視する視点で、一つのものがいくつかに分かれいくことの反対です。

一方、進化論などでいう進化というのはこの反対の方、つまりは「異化」——make the familiar strange——の方向です。従って、「馴化」というのは、進化の逆トリー、といいかえることもできます。進化が末広がりであるのに対し、馴化の方は尻つぼみだといいかえてもよい。

このように日本とて「馴化」の結果としての今日の単一性なのでして、はじめから単一であったように説くのは正しくありませんし、また今日においてすら、当初の多様性の名残りが随所にみられることも否定できない事実です。

そう考えると、やみくもに日本を単一国家と呼びなら

わすことが正しいかどうか、ふと立ちどまりたくもなるのです。

でも、です。

日本にも多様性の発生と歴史、したがってその遺構と痕跡がのこっているとはいひながら、アメリカのもつめくるめくほどの多様性と対置した場合には、やはり単一性の方に軍配をあげざるをえません。

アメリカというのは何といつても大へんな多様性の持ち主で、多様性という概念の具現化でもあるのです。

本稿においては、アメリカのもつ多様性の中でも、とくに人種と民族集団のそれに焦点をしぼり、できるだけ具体的に書き進んでいこうと思います。

ただし、内容的にはアメリカ英語とのかかわりにおける人種と民族、ということになりましょう。いいかえるなら、アメリカの人種の民族的多様性が、アメリカ英語にどのように照り映えているかを、アメリカ英語の具体例を数多くかかげることで検知していこうというのです。

ですから、アメリカの人種や民族について歴史的にその由来を跡づけたり、社会学的な調査についてレポートしたり、統計的にいろいろご報告したり、というのは本稿の第一義的な目的ではありません。

むろん折にふれて上述のような事柄に言及することもあります。それはむしろ専門書をご紹介する、という程度にとどめるつもりです。

私がもくろんでいるのは、アメリカ人にとっては——それも非専門家の市井のアメリカ人——ほとんど常識化しているような人種や民族についてのアメリカの実体や、そのあらわれとしての慣用表現をできるだけ沢山とりあげ、その実例を示し、大意を付け、背景をご解説申し上げる、という形です。

市井のアメリカ人にとっては常識化していても、日本のわれわれは案外と不案内で不得要領ということが少なくありません。しかしそれではわれわれの英語理解は凹凸のない、ノッペラボウで平板なものに了ってしまいま

すし、はんとくに英語を読みこなすことにはなりません。

もし市井のアメリカ人にとって常識なら、われわれかなりのレベル（と自負している筈）の英学生たるもの、一応は頭に入れておいてしかるべきだ、といえるように思ふのです。

人種と民族について、本稿はそれを目指します。

なお用例と大意についてひとこと。

まず用例については、用例中心主義の立場に立つ私が年来あつめてきたカードがその出所ということになりますが、それも ephemeral literature からのものを重視することにします。

これは「かげろうのごとき文学」という原義で、要は新聞とか雑誌などの刊行物のことですが、大文学や学術論文からの用例はできるだけ避けようと思います。そして一般のアメリカ人が日常的に目を通してであろうジャーナリスティックな書きものから主に選ぼうと思います。

その理由は、市井のアメリカ人にとっての常識、が事項の選択や解説の際の一つのメルクマールになるからです。

ふつうのアメリカ人が知らないことまで知ろうとするのは、専門の研究者にとっては当然ですし、好事家的な趣味としてもわかりますが、一般英学生のため、という本稿の目的からはかなり外れることになります。

ただし、高度の専門書というわけでなく、学識のある著者がかなりの教養のあるアメリカ人読者を対象に物した啓蒙書やエッセイなどは自由に引くつもりです。

あの国には社会科学や行動科学に関するかなり高度の通俗書(?)が多く、ある程度の知的レベルをもつ一般読者によって広く読まれていますので、それからは引用させてもらうというわけです。

学問の大衆化は、さいきんでこそ日本もそうなりつつありますが、何といてもアメリカはこの道の先達だからです。

他方、大意ですが、これはあくまでも内容を理解し、とくにことばの背景にあるものを捕捉していただく上の一助にすぎません。従って、厳密な意味での翻訳からはときとして大幅に逸脱するでしょう。

少なくとも直訳は避けるつもりですし、かなり自由裁量を活かした意味訳となるはずで、あえて大意と名づけたゆえんです。ご了承下さい。

ですから、そのおつもりで参考程度におとどめねがい、むしろ原文におつき下さるようお願いいたします。

原文はいずれも斬れば血の出るような現代アメリカ英語のチャキチャキで、これを十二分に吟味していただければ、英文読解力の涵養と、現代のジャーナリスティックな文体や措辞への馴れを深める上に資すること疑いありません。

そのために私のつたない大意が何らかのお役に立つよう願っております。

なおここで人種と民族という、まぎらわしい概念について簡単に区別しておく必要があります。

この2つは、日本語でも、たとえば朝鮮民族に対する日本人の感情を、人種的偏見と呼ぶなど、誤用されることが多いのですが、英語でも同様の混乱があり、あいまいさがまつわりついています。

元来、人種という概念は存在しえない、と説く人類学者もいるくらいで、『菊と刀』(*The Chrysanthemum and the Sword*)という日本論の名著で有名な故 Ruth Benedict 女史はその有力な一人でした。

彼女の場合、人種という概念の全面否定につよく傾かせたものはヒトラーによるユダヤ人虐殺のくわだてへの痛烈かつ当然な批判でした。彼女自身はユダヤ系ではありませんでしたが、ヒトラーの暴虐とその根拠となった人種論はとうてい容認できるものではなかったのです。ユダヤ人虐殺の基礎になったのが、ヒトラーとその一派が声高かに唱えた、アーリア人種の優位性、ユダヤ人種の劣等性、というあられもない、非科学的この上ない謬説だったからです。

ついでながら当時ヒトラーの盟友だったはずの軍国日本も、非アーリア人種の故をもって、劣等であると決めつけられたものです。

ヒトラー著『わが闘争』(*Mein Kampf*)の非削除版には、非アーリア人種の「劣等性」が日本人を含めてもっともらしく説かれています。

そういったわけで、人種という概念のあやふやさと、それが悪用されたときの危険、についてはきちんと止目することが大切ですが、一応の定義を加え、民族(ethnic group)との差異に触れておこうと思います。

一口でいうなら人種(race)とは、人間のもつ肉体的生理学的特長にしたがって人類を分けるときに用いられる概念というか物差しなのです。

その際に、いちばんはっきりしているのは皮膚の色で、それだけに世界の三大人種——四大人種を立て、さらに二十いくつかの亜種に細分することもあります——と

いうときは、黄色人種 (Mongoloid)、黒色人種 (Negroid) それに白色人種 (Caucasoid) と、色による区別を行ないます。

むろん皮膚の色だけが人種を分けるときの唯一の尺度ではありません。

たとえば、人間の頭がい骨の比率をとった cephalic index (頭部指数) というのは、人種を分けるときにかなりの確度があるとみなされています。長頭型とか短頭型というのがこれです。

蒙古人種の初生児のおしりにある青いアザ——蒙古斑——も人種を区別する折の一つの物差しになります。そのほか、血派型や指紋の分布、髪形状、体毛の多寡、などいろいろな肉体的な特長をもとに人種の別を立てていくわけです。

要するに人種というのは、文化的社会的な分け方ではなく、肉体的な諸特徴次元のものであるということです。従って、日本民族と朝鮮民族とは蒙古人種という同一の人種に属しているわけですから、日本人の朝鮮民族への人種的偏見といういい方は、正用ではないといわねばなりません。

他方、民族集団というのは文化的社会的な分け方です。くわしくはやがて本文中で、アメリカ英語における ethnic という形容詞——昨今ではそのまま名詞としても転用されます——と、その修飾辞としての用法を、具体的なコロケーションを数多くあげてご説明するときに譲りますが、ひとことで要約すると、次のようなことになりましょうか。

「共通の宗教、言語、政治、経済、歴史伝統などの多くを持ちあい、一定の地域を占める人間集団で、相互の類似性にもとづいた共属的な感情や意識が成立している場合、それを民族と呼び、他と区別する。」

人種とは明らかにちがうことがこれではっきりしたでしょう。

あわせて、民族と国民とはしばしば混用されますが、これまた誤用というべきで、とくにアメリカや中国、ソ連やユーゴスラビア——今日、チトー大統領の訃報に接しました——のような複合国家の場合には、一つの国民の中に多くの民族が包含され、ある民族が国境をこえ他の国家内の民族と共通の血縁や文化的共同性を共有する場合も少なくないのです。

チトー大統領が最後のユーゴスラビア人と称せられたのは、6つの共和国と4つの言語と2つの宗教をもつあの共和国連邦を、一つの国家に束ねることのできる偉材

は、彼をもって最後とするのではないか、という恐れがあったからです。

ユーゴスラビア国家 (ないし国民) というのは、複数の民族集団から構成された複合的な存在とみなされるべきなので、この点はアメリカも変わりません。

若干の少数民族を有しながらも、圧倒的大多数の日本国民が日本民族とイコールであるわれわれの常識は、世界的にみた場合にはむしろ圧倒的な少数派にしか属さない、という事実をいま一度思いおこしておくことは、アメリカ理解にとっても、またわれわれの国際理解の筋を本質的なところで違えないためにも、不可欠な準備作業といえましょう。

本 文

アメリカが人種民族のるつぽである、という説は従来から広く行なわれてきました。

アメリカの多様性 (diversity) を説く際にまず引かれるのが、人種と民族次元のそれであるのは、いまさら申し上げるまでもありません。

私も、アメリカはどんな多様性をもっているか、と題した論文——『国際英語のすすめ』(実日新書) 所収——の中で、まず人種的な多様性を、次に民族的多様性を取りあげ、さらに宗教、言語、地理、歴史その他の側面に及んでいます。

ですから本稿でアメリカの人種と民族について論ずるに当たっては、どうしてもその多様性という側面に焦点をあてざるをえないのです。

アメリカの人種的民族的多様性を一言にして要約する慣用表現として、もっともよく知られたのが、melting pot であることは申し上げるまでもないでしょう。

るつぽ、という日本語訳の原語であることもご存じのとおりです。

でもこの表現のルーツが、あるユダヤ系作家の物した同名の芝居であることは、あまりよく知られていないかも知れません。

次の用例をごらん下さい。

The writings of several American Jews, who as a group were both the least secure and the best educated of the new immigration from Southern and Eastern Europe, marked successive stages in a theory of acculturation. In his play titled *The Melting-Pot*, Israel Zangwill paid homage to "the great Alchemist [who] melts and fuses them with

his purging flame—Celt and Latin, Slav and Teuton, Greek and Syrian,” and, as represented in the paly's hero and heroine, Jew and Gentile.

(William Petersen: *Japanese Americans*, p. 219)

(大意: いくたりかのユダヤ系アメリカ人の書きものは、文化統合に関する一つの理論が、どのような段階を経てきたかを明らかにしてくれる。ユダヤ系こそは南欧および東欧からアメリカにやってきた新移民の中で、もっとも不安定でありながら教育程度の高い集団であった。

その名もイブラエル・ザングウィルの手になる『るつぽ』なる芝居の中で、筆者はケルトやラテン、スラヴやチュートン、ギリシアやシリアなど、異なる民族諸集団を一つに鋳溶かし、すべての特色を削ぎおとす熔で一つにまとめてしまうかの偉大な煉金術師に対し敬意を払うとともに、芝居のヒーローとヒロインにそれぞれユダヤ人と非ユダヤ系キリスト教徒を配することで、この両者にも敬意を示している。)

訳はかなりの意味訳ですが、とにかく1908年に書かれたこの芝居以来、アメリカといえば「人種民族のるつぽ」というイメージが定着してきました。

もっとも melting pot というと、すべての人種や民族が一つに鋳溶かされるというひびきが強いのです。

ところがこのイメージに対しては、2つの批判があります。

一つは、黒人などははじめから排除され、melt される対象とは考えられてなかった、とする批判です。Anston Smith 編の *The Search for America* の pp. 54—55 にはその趣旨の論文がのっています。そういえばさきに引用した一節にも広義の白色人種は出てきますが、黒人とか元来がわれわれと同じく蒙古人種に属す先住のアメリカ・インディアン、それに東洋系やメキシコ系は出てきません。

また著者は、“America is God's *Melting Pot* where all the races of Europe are melting and reforming.” ともいっています。

つまり Zangwill の意識には、白色人種の melting pot としてのアメリカは存在していましたが、非白色人種を包含する melting pot は存在しなかったのです。

これは重大な手落ちといわねばなりません。

いま一つの批判は、melting pot という異質なものが自然に混り合うというイメージがつよく、人為的といふか、意図的な鋳造とか鋳出とかいうニュアンスが落ち

てしまっている、という点に向けられます。

つまりアメリカにおける Americanization の過程というのは、自然現象というよりは、明確な意志をもった一つの操作の過程だ、というのです。

少なくともそれが、以下の気鋭の日系社会学者の説くところです。

If anything characterizes this *melting pot*, the popular image of American acculturation, it is its non-melting quality. Instead of merely amalgamating, mixing, or blending, one finds the process of production, casting, molding. The *melting pot* leads to a cast of process, out of which come cast characters, cast from an American mold, or better yet, a 100% American mold.

(Denis Ogawa: *From Japs to Japanese*, pp. 26—27)

(大意: アメリカにおける文化統合はふつう「るつぽ」というイメージで捉えられているが、アメリカという「るつぽ」を特長づけるものが一つでもあるとするなら、それはその「非るつぽ性」である。

アメリカにおいてわれわれが見出すのは、いろいろなものが自然に混合され、混ざりあい、混淆していくことにとどまらず、むしろ準備され、鋳型にはめられ、整形鋳抜きされる、という過程である。

すなわちこの「るつぽ」は「鋳造」という工程に至り、そこで鋳造された人間のお出まし、ということに相成る。アメリカ人という鋳型で鋳出された人間、それも 100 パーセントのアメリカ人を鋳出すような鋳型であればなおさら上々、というわけである。)

原文も大意もちょっとお判りにくいかも知れませんが、要は「溶ける」という自動詞的な展開ではなく、「溶かして」「鋳型に流しこむ」という他動詞的な展開がアメリカの生成の過程であり契機であった、というわけです。そこに「非るつぽ性」という著者の逆説が生きています。

なお上記の用例で、“a 100% American mold” という表現は興味をひきます。

というのは、アメリカ人、とくに比較的アメリカに遅れて入ってきた新入りのアメリカ人の中には、そのアメリカ性に十分な自信がもてないせいか、ふつうのアメリカ人よりもっと「アメリカ的」であろうとして、ときにはアメリカ人であることを極端なまでに、それも情緒次元で主張し、さらには超国粹主義という形で政治化 (politicize) していくことがあります。

かつて共産党員だった人が転向のはてに、こんどはブ

口の激越な反共主義者になっていくのと一脈相通ずるものがあるかも知れません。

こういった super-patriot の手合いを、しばしば 120% のアメリカ人とか、200% のアメリカ人と申します。

そして彼らは往々にして新移民だったり、帰化米人 (Americans by naturalization) だったりするのです。

水爆の父といわれ、右寄りのタカ派的言動で知られるエドワード・テラー博士などはその好例です。彼は、ハンガリー生まれで、しかもユダヤ系の帰化市民なのです。

ところで、melting pot という発想が、積極的な文化統合の象徴であり、しかもそれはリベラル派の旗印であったとする観察もあります。

これは上記のオガワ (ハワイ大学) 教授の説と一見したところ若干異なりますが、オガワ説がある種の逆説だと考えれば、両者のへだたりもそうひどくはないといえます。

黒人と白人との統合についての言及です。

This matter of community control—of schools, of jobs, of the police, and all the other institutions which bear directly on the ghetto dweller—is likely to be the crucial issue between black and white America in the foreseeable future. It seems to us that, even within the two-category system which we find in the American past, present, and future, there are distinct possibilities for progress, for amelioration, for social peace. We suspect that this progress, if it comes at all, will come within a modified system rather than by a fracturing of the one which exists. The traditional liberal solutions and slogans—the *melting pot* and total integration—do not seem to us to be particularly relevant.

(*American Racism*, p. 129)

(大意: 貧民街の住人に直接かかわりのある、たとえば学校や職場や警察といった機構が地域社会の管理下にあるという問題は、予見しうる将来における、黒人と白人社会との関係にとり決定的に重要な問題点であろうと思われる。

私のみるところ、昔もいまも、そして恐らくは将来ともアメリカに存在しつづけるであろう黒白二つの範疇に分化した制度のわく内においてすら、事態の前進や改善、それに社会平和が招来される可能性は大いにある。そして前進がみられるとするならば、それは現行制度の破砕によってではなく、むしろその手直しを通じてもたらされるであろう。

人種の「るつぽ」論を正面に押し立て、黒白の全面

的な統合を目指すのが従来のリベラル派の解決案であり戦術でもあったが、これは必ずしも的を射ていないのではないか、というのが私の読みである。)

つまりこの筆者は黒と白という bi-racial (二人種) な共存の論理——たとえば separate but equal 的な——をこそ正面に出し、そのわくの中で解決をはかっていく方が現実的だ、というのです。

これは、黒人と白人の問題についてずいぶん唱えられてきた議論で、多くの黒人のかかえ、白人との間にそれなりの bi-racial な秩序を作り上げてきた南部の方が、黒人の存在については処女性をしかもってこないままに、急激に多くの黒人の流入 (in-migration) を迎えてテンヤワンヤしている東北部よりも、むしろ事態は良性、という見方も現に存在しているのです。

有力な黒人リーダーの中にもこの見方をとる人がいる程です。

異人種への偏見、しかも百数十年前までは奴隷として売買の対象だった黒人、という歴史的事実の重圧、そして偏見 (prejudice) の外的表現としての差別 (discrimination)、さらには差別が逆に偏見を逆に補強し内在化させていくという形での両者間の相互関連 (interaction) … いずれをとってみても、単なる掛け声やスローガンだけでは、解決にならぬということなのでしょう。

何か私はこの差別の問題——日本の場合もそうです——の中に、人間のもつ、とてもかくてもものうのう、というたぐいの業の深さを見てしまうのです。業、という仏語しか思い出せないのです。

ところでアメリカは決して「るつぽ」ではなく、また「るつぽ」であってはならない、という議論がだんだんと力を得てきました。

異なる人種や民族集団が、みんな一つ色に染められるのではなく、(教育勅語の文句ではありませんが) おのおのそのところを得て、それぞれの自主性というか identity を保ち残していくところにアメリカの特色があり、偉大さすらが存するのだ、という論調です。

これを、社会科学的に少し鹿爪らしくいうと Horace Kallen の用語にしたがって cultural pluralism と呼びます。

そして pluralism とか pluralistic society——多元性とか多元社会とか仮訳しておきます——という表現は、最近とみにひんばんに見聞きされるようになりました。

むしろこれらの用語は、人種や民族集団とのからみ以

外にも、価値や生き方、政治的経済的な立場やイデオロギーの多元性という文脈でも使われます。

次は、労働組合に関する一文です。

Labor's larger challenge in any event is the ability of unions on their own, as part of the free play of ideas and allegiances in a pluralistic society, to persuade workers of every description that unionism still has something of moment to offer them in economic betterment and protection for their dignity as people. In private conversations, most top unionists do not hesitate to concede that they are doing badly in that endeavor, to the degree they are trying at all. They are equally frank in admitting that they have few novel ideas on how to do better in this struggle for hearts and minds.

(*Fortune*: Aug. 27, 1979, p. 35 & p. 37)

(大意：労働側のかなえの軽重を問われるより大きな踏み絵はアメリカのようにあらゆる考え方や忠誠の対象が自在に行きかう多元社会にあって、経済的向上と、人間としての尊厳の確保のためにいまなお重要な何かを提供できる組合運動というイメージを、はたして自力で、多種多様の労働者に売りこむことができるかどうか、という点である。

この点になると、ほとんどの組合指導者はおもて向きはともかく私的な会話では、よしんばささやかな努力がこの面でなされているとしても、その成果はさっぱりである旨を隠そうとはしないし、一般労働者の心情的な支持をめぐるこの闘いにおいて、どうしたらもっと成果をあげられるかについて、これという名案を持ちあわせないことも認めるにやぶさかではない。)

組合とは好ましいもの、労働者の権利を守るための不可欠な存在、というかつての信頼、労使関係を二元的な対立概念として、さきほどの *American Racism* の用語を借りるなら two-category system として捉える発想、これらが価値の多元化とともに明らかなゆらぎを見せ、勤労者自体の組合離れや一般市民の忌避感情が高まる中で、どうしたら組合運動 (organized labor) が市井の庶民の hearts and minds——さいきんの流行語の一つです——をとりもどせるか、というわけです。

人種や民族についての pluralism の用例は次回にまわすとして、あと2つ、面白い用例をご披露しておきます。1つはカーター大統領の選挙運動に関するもので、melting pot という表現のもじり (take-off) ですが、ア

メリカが多元社会であることを如実に示す興味深い文章です。漫文なのでそのつもりでお読み下さい。大意もその趣きを出すべく、多少苦心してあります。

Items in the news, which remind us of the awful elongation of the American political season. Begin with yet another depressing day in the life of President Carter, who to stress the need for the spiritual recovery of America, took an Amtrak train to Baltimore to woo the Italian vote.

Now there is nothing wrong with wooing the Italian vote, if you will remind yourself that Italians are Americans, whose forefathers came from Italy, but whose concerns are presumably the same as those Americans whose forefathers came from France. So President Carter begins his speech by saying, "We are not a melting pot: we are more like a pot of minestrone."...

Then Mr. Carter said, "I trust the political judgment of the people of Italy." I can't see why. The political judgment of the people who gave us Carter is bad enough, why go on about the political judgment of the people who gave us Mussolini?

(*Pacific Stars & Stripes*: Aug. 19, 1979)

(大意：ニュースのネタは、アメリカの政治の季節が、いやになるほど長くなっていることを思い知らせてくれる。

その第一は、今日も今日とてカーター大統領に関する、ウンザリするような日程にまつわるニュースだ。

彼、アメリカの精神復興の必要を訴えるべく、アムトラックに乗ってボルティモアに赴き、イタリア系の票田にお世辞を使ったというわけ。

むろん、イタリア系の票田に色目を使うのは悪いことじゃない。ただイタリア系といってもれっきとしたアメリカ人で、祖先がイタリアから渡来したにすぎないこと、したがってフランスから渡来した祖先をもつフランス系アメリカ人と、その関心のありようはちがわない等、という点を覚えておくことは肝心だ。

そこで大統領さんも、のっけからこう言ったもんだ。「アメリカは「るつぽ」なんかじゃありやしない。同じ「つぽ」でも、イタリア風スूपのミネストローネの入った「つぽ」だ」って。(中略)

それからこうも言った、「私はイタリーの皆さんの政治的判断力のたしかさを信じている。」

よせやい、っていいいな。

カーターとやらしい大統領を恵んでくれたアメリカ

国民の政治的判断力もさることながら、ムッソリーニなんぞを生んだイタリー国民の政治的判断力なんて、ご免蒙りたいもんさね。)

いかがでしたか。

A pot of minestrone というのはなかなか秀逸ですね。ところで、アメリカの多様性、しかも構成諸要素の個性を残した形で多様性をあらわすものとして、さいきんよく使われるようになったのが、American mosaic といういい方です。これは melting pot の全く逆といってもよい表現で、いまひとつ、ミネストローネに刺戟されて食物に関する喩えを使うなら、サラダのようなアメリカといいかえることもできます。

レタスやセロリーやピーマン——英語では green pepper——などがそれぞれ原形、つまりは個々の identity を保ち残しつつ、～サラダという一つの料理としての統一をみせている、とまあ、こういうわけです。

そのときのドレッシングにあたるのは、アメリカという国の場合、いったいなんでしょう。

それはとにかく、次の用例をどうぞ。

With any success, social analysts say, such a strategy could offer a blueprint for other ethnic groups in the *American mosaic*—Eastern Europeans, Hispanics and Orientals—with perhaps a large impact on U.S. foreign policy, just as black successes in civil rights spawned similar movements among other dissatisfied elements in American life.

(*U.S. News & World Report*: Oct. 15, 1979, p. 41)

(大意: もしこの種の戦略がうまくいくようだと、東欧系、スペイン系、東洋系など、モザイクとしてのアメリカを形づくる他の民族集団がアメリカの対外政策に大きな影響力をもつ上で、一つの青写真が生まれるかも知れない。

それは黒人による公民権運動の成功が、他の不遇な集団に同じような動きを触発したのと同工異曲といえよう。)

モザイクとしてのアメリカ、というイメージにはるつぽにはない落着きを覚えるのですが、これは私一人でしょう。

(国際商科大学教授)

英語展望

合本第5巻
Nos. 49-60

在庫僅少 定価6,500円

英語教育の現状と改善の方向 (2), (3), (4)

平泉氏の英語教育改善案により再び活発になった英語教育存廃論を考える。

オーラル・アプローチ実態調査

オーラル・アプローチ実態調査/高校段階の Pattern Practice などを中心に、英語教育界の情報

を網羅。

どんな英語を学ぶべきか

K. バトラー, W. グロータース, 比嘉, 中尾, 國弘の5氏によるパネル・ディスカッション。

日本の英語教育

過去20年間の日本の英語教育の歩みを、教材・教授法・教員養成等の分野に分けて詳述。

国際人の条件

「日本人は国際人になりうるか」というテーマをめぐっての、有益かつ率直な意見を集。

English Teaching Forum

年間購読料 1,600円

申し込みは直接 ELEC 出版部へ

アメリカ合衆国一流の言語学・英語教育の専門家の協力を得て編集された、外国語としての英語教育の専門誌。世界百か国以上で読まれており、英語教育に関する世界の最新情報が得られる情報源として高く評価されている。通常年4冊発行。

FORUM バックナンバー案内

No. 3 July, 1980

Integrating Group Work with the Teaching of Grammar/Opening the Language Lab/The Rules for Adult Second-Language Lab

No. 2 April, 1980

Techniques for Teaching Reading/English for Specific Purposes: A Mexican Case Study

定価 各400円 (送料共)

新教材論： Notional Syllabus が意味するもの

石 田 雅 近



過去10年間の海外における外国語教育の論壇を回顧してみると、言語学や心理学の影響をまともに受けてその中心理論の推移のままに揺れ動いてきた ESL(English as a Second Language) や EFL(English as a Foreign Language) が、1970年代に入り psycholinguistics や sociolinguistics などの新しい研究が盛んになるにつれて、それまでとは違った独自の ESL(EFL) のあり方が求められてきたという事実が気がつく。また、独立した分野としても ESL(EFL) が着実にその領域を広げてきたことは、関係論文のタイトルに目を通してだけでも明らかである。

教授法に限って言えば、ひと昔とは異なり、必ずしも言語学や心理学に裏付けられていない、いわゆる「型にはまらない」教え方が次々に試みられ、大きな注目を浴びたのが70年代であった。この「どのように教材を提示すべきか」という教授法のはなばなしい話題の影に隠れて、さほど目立たなかったが、「何を教材として選択すべきか」という教材についての議論が、ここ数年来、俄に高まってきた。その教材論の中心となっているのが、Notional/Functional Syllabus (伝達内容別/言語機能別シラバス) と呼ばれているものである。

この教材論は、1971年に西ヨーロッパ21か国の協力により、フランスの Strasbourg にある Council of Europe の下部組織として設立された Council for Cultural Cooperation を拠点に、イギリス人 David Wilkins が、John Trim, Rene Richterich, Jan van Ek などの応用言語学者と共に行った協同研究から生まれてきたものである。この研究所は、歴史的にも地理的にも互に交流の多かった西ヨーロッパ諸国が、自らの置かれている multi-lingual community の立場を再認識し、適正な外国語教育を通して意志疎通の密度を高め、その地域の統合を一層強くしていこうという意図で発足した。

彼らの研究は、もともと外国語教育を成人教育、ある

いはさらに大きく生涯教育の一環として促えたところから出発している。そして、学習者の needs を優先させ、その分析を土台にしている。西ヨーロッパでも、通常の学校教育を終了した後に、更に自分の目的と必要に応じて外国語学習を続けたいとする人が増えていたのは、当然な時代的要求であった。そのような要求に応ずべく成人の学習者を対象に、話しことばによる意志伝達能力 (communicative competence) をつけるのを最大の目的として授業計画を立てるのに必要な指針となるものを打出すことが、彼らの研究課題であった。

Wilkins の Notional Syllabus は、1971年の論文 “The Feasibility of a Situational Organization of Language Teaching” (CCC/EES(71), Strasbourg) に端を発し、翌年コペンハーゲンで開催された第3回応用言語学国際会議で発表した論文 “Grammatical, Situational and Notional Syllabuses” (British Council 編 *ELT Documents* 73, London), 73年の “An Investigation into Linguistic and Situational Content of the Common Core in a Unit/Credit System” (Council for Cultural Cooperation 編 *Systems Development in Adult Language Learning*, Strasbourg), 74年の “Notional Syllabuses and the Concept of a Minimum Adequate Grammar” (S. P. Corder & E. Roulet 編 *Linguistic Insights in Applied Linguistics*, Brussels) を経てその論拠が固められてきた。76年には、それらが纏められ、Oxford University Press から *Notional Syllabuses* という本となって現われた。同じ年に、van Ek が language function と notion についての inventory とその具体例を豊富に載せて *The Threshold Level for Modern Language Learning in Schools* という本を Longman から出版した。

この2冊の本の出現により Notional Syllabus の基礎ができたと言えよう。2,3年前からは、ヨーロッパばかりでなくアメリカでも、これに対する関心が高ま

り、外国語教育専門誌にその研究論文が取上げられるようになり、昨年4月には、ついに、今や英語教育の分野では世界で最大の発行部数を持つと言われる *English Teaching Forum* 誌でもその特集が組まれるに至った。

Notional Syllabus は、成人学習者の目的と必要を優先させ、それに応じて実際のコミュニケーションに直結した言語材料を取捨選択し配列するという点で、やはり70年代に入りイギリスを中心に話題となってきた ESP (English for Specific Purposes) と同じ流れを汲むものである。しかし、Notional Syllabus の方は、教材選択、作製に際して教師が直面する問題を具体的に解決する方法を示すものではなく、単に、組織的な外国語教科カリキュラム案であり、かつ教材作製計画案である。毎日の授業で、教材に関して多くの問題を抱えている教師が、Wilkins や van Ek の本にその解決を求めても期待を裏切られるだけだろう。これらの本は、あくまでも、教材を中心に据えた授業計画案であり、決して臨床的なアドバイスを与えるものではない。

Wilkins が1971年から74年までに毎年発表した論文を順に追っていけば分かるように、彼の Notional Syllabus の発端は、従来の Grammatical Syllabus (文法項目別シラバス) や Situational Syllabus (場面別シラバス) に対する反省と批判にあった。つまり、文法、語彙项目的に理解しやすいものから漸次むずかしいものへと配列した教材や、またその欠点を補う形で現われてきた場面を中心に展開する教材で進めて行く授業では、もはや、学習者に必要な communicative competence をつけることはできないという認識に立つものである。

事実、Grammatical Syllabus に基づき、既習内容を踏まえながら進む漸進的教材で学習した場合、学習者が感ずる負担も少なく、新教材への円滑な移行が期待できるし、また学習言語の全体像を着実に把握できるという面で優れていることは確かである。しかし、言語を用いて実際に何かを伝えようとする訓練が欠けている上に、その伝達する意味内容を整理するという訓練もなされないために、クラスで行なった作業の枠を一步でも越えようと、まったく何も言えなくなるということになる。文法規則や統語構造、音韻関係の練習が中心となるこの種の授業では、linguistic competence (言語操作能力) はつくが、その授業の作業だけで communicative competence をつけることは無理であろう。

一方、Situational Syllabus は、扱う教材にコミュニケーションに必要な社会的意味を持たせたということで、Grammatical Syllabus の教材に欠けているものを補っているが、その最大の弱点は、個定した場面での

み、言語材料を操作しがちな要素を持っていることであろう。実際のコミュニケーションの場面では、それに加わる人々の関係、たとえば社会的地位の差、利害関係の有無、親密さの度合い、心的態度の相違などが、伝達する意味内容と複雑に交錯することになるので、場面別教材に見られるように簡単には規定できないものである。結局、今までの場面別教材には、ある特定の場面を発展させ、どのように関連可能な場面に応用したらいいのかという配慮がなされていなかったと言えよう。

意味中心に分類された Wilkins や van Ek の Syllabus の inventory は、まだまだ問題が多く、両者の間でさえも notion や function ということばの定義も一致していない。しかし、いずれにしても、コミュニケーションを行なう時に伝達しようとする内容、それを載せる言語表現形式、さらにそれを使うことによって生ずる言語波及効果を細分化し、暫定的なものながら、その inventory を作り上げたことは、これまでにない画期的なものとして評価される。これをたたき台にし、彼らの分類を組み合わせ、いかに具体的な教材として生かすかは、様々な学習目的を持つ学習者と直に授業で接する教師に任せられた仕事となろう。

ただ、彼らが分類した inventory も普遍的なものではなく、時代、社会、国民性の違いなどによって細部が変わりうるもので、それをいかに日本人の価値観、感受性、さらに表現方法に合った形で再編成するかということが、この Syllabus を日本で応用する際の課題である。その上、「使える教材」を書き上げるには、それを使用すると思われる学習者の needs の分析結果に基づき、英語と日本語をそれぞれ母国語とする textbook writer がチームを組むことが必要である。

日本の英語教育、特に中等英語教育の中で、「言語活動」の必要性が叫ばれて久しいが、今日でもなお、依然として学習者の linguistic competence を communicative competence に繋げることの困難さは変わっていない。その2つの competence の距離を何とかして縮めたいと願っている教師に、この Syllabus が大いに参考となることは間違いない。

最後に、Notional/Functional Syllabus を反映したテキストが、イギリスで続々と出版されてきているが、その中で次の3冊をご参考までに挙げておこう。

1. L. Alexander, *Mainline Beginners A/B*, (Longman)
 2. R. White, *Functional English*, 2 vols. (Nelson)
 3. L. Jones, *Notions in English*, (Cambridge Univ. Press)
- (ELEC 研修所講師)



漱石のロンドン(その6)

伊 村 元 道

17. 「世界の大都会」の印象

いわゆる名所旧跡を訪ねたり観劇に出かける前に、ロンドンについての漱石の一般的印象をまとめておこう。交通機関については前回すでにふれたが、最初の年の暮れの妻への手紙には、こう書いている。

倫敦の繁盛は目撃せねば分り兼ね候くらい、馬車・鉄道・電鉄・地下鉄・地下電鉄などくもの糸をはりたるごとくにて、慣れぬものはしばしば迷い途方もなき所へつれて行かれ候ことこれあり、剣呑に候。

小生下宿（当時はフロッデン・ロード）より繁華な所へ行くには、馬車・地下電気・高架鉄（道）・鉄道馬車の便これあり候えども、処々方々へ参り候ゆえ、時々見当違いの所へ参ることこれあり候。

倫敦の中央にては、日本人などを珍しそうに顧みるもの一人もこれなく、みな非常に自身のことのみに忙しき有り様に候。さすが世界の大会だけこれあり候。

しかし、その「世界の大会」の印象ははなはだ陰うつである。それは天候のせいばかりではない。最初の冬の日記から。

倫敦ノ町ニテ霧アル日太陽ヲ見ヨ、黒赤クシテ血ノゴトシ。トビ色（茶かっ色）ノ地ニ血ヲモッテ染メ抜キタル太陽ハ、コノ地ニアラズバ見ルアタワザラン。

倫敦ノ町ヲ散歩シテ、試ミニ痰ヲ吐キテ見ヨ、真ッ黒ナル塊ノ出ルニ驚クベシ。何百万ノ市民ハコノ煤烟トコノ塵埃ヲ吸収シテ、毎日彼ノ肺臓ヲ染メツツアルナリ。我ナガラ鼻ヲカミ痰ヲスルトキハ、氣ノヒケル程氣味悪キナリ。

世界に先駆けて産業革命を迎えた大英帝国の首府はまた世界最初の公害都市でもあった。OEDによれば、'smog' という単語の初出は1905年、すなわち漱石のこの日記の4年後ということであるが、現象自体はそれ以前からあったことは言うまでもない。当時のロンドンの人口はおよそ450万人。

そのロンドン市民たちは、漱石の目にどのように映ったか。まず彼らの服装から。

西洋にては金が気がひける程入り候。留学費でどうしてやるかが問題に候。町などへ出れば、普通の人間はみな日本の勅任官ぐらゐな身なりをして歩行いたしおり候。洋行生がしゃれるのはもっともに候。これが当地にては普通のことに候。

これはロンドン到着後2日目の妻への手紙から、3か月たつと観察も一段と具体的になる。

当地の商人紳士、少し身分あるものは平生必ずフロック（コート）に絹帽（シルク・ハット）をいただき候。男子服装はすこぶる地味にて、背広も黒多く、ズボン縞あれども黒ずみて遠方から見れば無地と思うようなもののみに候。

中以下は夏冬同じものをつけおり候由、少し上等になれば、晩には必ず燕尾服に着替えて食事をなす風に候。燕尾服は必ず晩の礼服ときまりおり候。葬儀・結婚などの大礼にても、日中執行するものは必ずフロックを用い申し候。

もっとも、全部が全部バリッとしているわけではない。

中にはクズ屋からもらったようなシルク帽をかぶ

り、ヘンテコなフロックを着ているのもこれあり、尾羽うち枯した浪人と申すぐらいなところなるべし。

このフロック・コートという礼服、今ではモーニングにとって代られ、ほとんど着用されなくなったが、明治時代には日本でもよく着た。漱石もロンドンへ来てからフロックと燕尾服を作る。

これは日陰町のごとき所ゆえ、無論ごく粗末なものに候。そのうえ、フロックは出来損ない申し候。これはようやく旅費の余りで調え申し候。しかるに、フロックの袖口広く外套の袖狭く、大いに困難いたしおり候。

帰朝後4年、新調した漱石は、この倫敦製のフロック・コートを愛弟子の中川芳太郎に与えた。

さて、このような服装をした紳士たちはどんな人種であったか。

往来ヲ歩クト、イズレモ小僧ラシイ顔バカリダ。愛敬ノアル顔ラシテイルモノハ一人モオラス。ソノ代り、子供デ鼻ヲ垂ランテイル者ハ一人モナイ。

今日ではとても想像もつかないが、明治の日本では「鼻垂れ小僧」は普通だった。

当地のもの一般に公德に富み候は感心の至り、汽車などにも席なくて佇立しておれば、下等人人足のようなものでも席を分かち譲り申し候。日本では一人で二人前の席を領して大得意なる愚物もこれあり候。

漱石は妻に向かってこう説きながら、半年後には、自身も公德心の欠如を指摘される。

Balhamニ至ル。帰途、鉄道馬車ニ乗ラントス。人足余ヲ捉エテ、降リル人ヲ待テ、ト言フ。感心ナコトナリ。

漱石のこの経験、はたして80年後の今日の日本人にはすでに無縁のものであるといえるだろうか。もっと下層の人々はどんなだったか。

町ヲ散歩シテモ、公園ヘ行ッテモ、汚イゴロツキミタヨウナ者ニ会ッテモ、悪口セヌハ感心ナリ。

公園ニチューリップガ咲クノハキレイダ。ソノ傍ラ

ノロハ台（ベンチのこと）ニ非常ニ汚ラシイ乞食ガ昼寝ヲシテイル。大変ナ contrast ダ。

汚イ町ヲ通ッタラ、盲人ガオルガンヲ弾イテ、黒イイタリー人ガバイオリンヲ鼓シテイルト、ソノ傍ラニ4歳バカリノ女ノ子ガ真ッ赤ナ着物ヲ着テ、真ッ赤ナ頭巾ヲカブッテ、音楽ニ合セテ踊ッテイタ。

次は、ロンドン西南の場末町トゥーティングへ引っ越してからの日記から。

スコブル賑ヤカナリ。我が住ム所ハ Epsom 街道ニテ、ココニ男女馬車ヲ駆リ、ラッパヲ吹キテ通ルコトオビタダシ。近所ノ貧民ドモマタ往来ニ充滿ス。（5月27日）

Epsom はロンドン南方24キロの Surrey 州の都市で、その南西郊外 Epsom Downs ではダービー競馬が行われる。その開催は5月最終または6月の第1水曜日ということになっている。6月5日（水）の日記にはこうある。

今日 Derby Day ニテ、我が家ノ付近大騒ギナリ。夕景ハ彼ララッパヲ吹キ馬車ニ乗リテ帰り来ル。スコブル雑踏ナリ。

順序が逆になるが、5月27日の賑わいは、この日が Whit Monday（聖霊降臨祭の次の月曜日で、年4回の bank holiday の一つ）にあたっただためであろう。

W. S. Maugham の処女作 *Liza of Lambeth* は前にもあげたが、その第4,5章にはこの bank holiday（といっても5月ではなく8月の第1月曜日）の行楽の有り様が描かれていて、漱石日記の理解に役立つ。ライザは町内の人々と乗合馬車を雇って遠出する。以下、北川錦二氏訳『ライザの初恋』（講談社文庫）から拝借する。

出発までには、まだ30分ほど間があったが、馬車は、正面の入り口の前にひきだされてあった。それは大きくてながく、座席が横にならんで、人が4人ずつ並んで座れるようになっていて、たくましい馬がそれにつけられ、御者が馬具を点検していた。…食料を入れたいくつかの大きな籠が運びだされ、積みこまれた。ビールの箱もひきあげられ——座席の下、御者台の下、馬車の下まで——ありとあらゆる場所につめこまれた。

…御者の鞭がビシッと鳴り、ラッパ手の角笛とともに、馬車は、乗客から湧き起る喚声につつまれて、道

をガタガタと走りだした。

…彼らは東に向かって走っていたが、時がたつにつれて、道路はいっぱいになり、往き来が激しくなってきた。とうとう、一同はチングフォードに通じる道にさしかかり、同じ方向に進む馬車の仲間入りをした——それは、二輪の驢馬車、小馬がひいている車、商用馬車、犬車、四輪馬車、別種の四輪馬車など種々雑多、ありとあらゆるたぐいのもので、乗客を満載し、がんじょうな4人の紳士をヨチヨチとひいているあわれな驢馬がいるかと思えば、40人の乗客をらくらくとひいている2頭のがっちりとした馬もいた。彼らは、わきをとるたびに、喚声をあげ、挨拶をかわしたが、「赤獅子屋」号は、そうぞうしきで、一段と群をぬいていた。

彼らの目的地 Chingford は、Epsom とは正反対の、ロンドン東北郊外の実業地で、そこで彼らは食事をし、森の中の小道を散策し、ロバに乗ったりヤシの実落としをして、楽しい1日を過ごそうというのであった。

18. 芝居見物

漱石はもちろんこのような庶民の行楽とは無縁であった。彼の楽しみは英語の勉強もかねて時々行く芝居見物であった。日記に記録されているのは、ロンドン到着4日後の1900年10月31日から翌年6月までの8か月間の合計10回であるが、実際はもう少し多かったかもしれない。

ロンドンの劇場といってもピンからキリまでであるが、一流劇場は都心の盛り場 West End に多い。到着後最初に行ったのは Haymarket Theatre で、R. B. Sheridan の *The School for Scandal* (1777) を見る。諷刺喜劇なのであるが、これが外国人にはなかなか笑えない。漱石は、ドイツから来ていた後の憲法学者美濃部達吉と一緒に見に行ったという以外は、特に感想を残していない。「セビロ赤靴にて飛び込み大いに閉口した」(妻宛)というのはこのときのことか。

次は、Haymarket の向こう側にある Her Majesty's Theatre。これは4年前名優 Sir Herbert Beerbohm Tree (1853-1917) によって完成されたばかりの1,200席ほどの新劇場であった。Tree は Shakespeare Festival と称して、シェイクスピア劇を毎年数週間上演するのを例としたが、漱石は2月23日土曜日のマチネーに同宿の田中孝太郎と出かけて、*Twelfth Night* を見ている。「Tree ノ Malvolio ナリ。装飾ノ美、服装ノ麗、人目ヲ眩スルニ足ル」と日記にある。Malvolio というのは Olivia 姫の執

事でうぬぼれ男、この喜劇では大いに笑わせる重要な役で、それを座頭の Tree が演じた、というわけである。

妻への手紙には「真面目な芝居に良き席にて見物せんとするには、燕尾服をつけ白襟ならざるべからず、喫煙は無論出来ず、すこぶる窮屈に候」とこぼしているが、この日は「席ミナ売り切れ、ヤムヲ得ズ Gallery (3階の大衆席)ニテ見ル」とある。『永日小品』の中の「暖かい夢」という章は、この時の印象を8年後に想起したものであろうか。

3月7日にはもう少し東寄り、Waterloo Bridge のほとりにある Drury Lane Theatre に出かけている。ここは収容力3,000、ロンドン最古の由緒ある大劇場ではあったが、当時はすっかり低俗になって、本物の動物を舞台に登場させたりしてサーカスマがいの演出をやっていた。『ベデカ』には、'Shakespeare's plays, comedies, spectacular plays, English opera, etc.' と上演種目をあげた後に、'Pantomime in winter.' とあるが、これは日本語でいう「パントマイム」(無言劇)ではなくて歌や踊りをふんだんに盛り込んだ「おとぎ芝居」のこと。漱石が見たのもこれで、*The Sleeping Beauty* (眠り姫) を上演中だった。彼はこれを見て「実ニ消魂ノ至リナリ。生レテ始メテカカル華美ナル者ヲ見タリ」と日記に書いた。以下は当夜の光景を妻に知らせた手紙。

芝居は修業のために時々行くが、実に立派でたまげるばかりだ。昨夜もドルリー・レーンという倫敦の歌舞伎座のような所へ行ったが、実に驚いた。もっとも、その狂言は真正の芝居ではない。パントマイムといって、舞台の道具立てや役者の衣装の立派なのを見せる主意であって、これは主にクリスマスにやるものだが、はやるものだから去年から引き続いてやっている。(倫敦は広い所だから芝居の数もむやみにあるが、はやる狂言になると3年も続けて一つ芝居をやって、そして人が入るのだから不思議なものだ。)

そこでこの道具立ての美しきことと言ったら、到底筆には尽せない。観音様の棟に彫りつけてある天人が5,60人集まって絵にかいた竜宮の中で舞踏をしていると、その後からまた5,60人が舞台の下からセリ出してくる。急に舞台が暗くなると、その次の瞬間にはことごとくみな道具が替っている。突然舞台の真ん中から噴水が出て、この噴水がいま紫色であるかと思うと黄色になり、その次には赤くなり青くなり、非常な金銀をちりばめた殿閣が急に現われて、それが柱天井の中にみな電気がついて光る。ダイヤモンドで家が出来ているようだ。女の頭や衣服も電気でもって赤い玉や何

かが何十となくつく。

それが一幕や二幕ではない。差し変り引き変り、実に莫大な金を費さなければ出来ない。まるで極楽の活動写真と回り燈籠とを合併したようだ。何しろ大きな水晶宮がセリ出すかと思うと、きれいな花園がセリ下がって来たり、その後から海に日が当って山が青く見える所が次第に現われて来たり、これが次第に雪の降る景色に変化したり実に奇観である。

日記には、このほか「KeatsやShellyノ詩ノdescriptionヲソノママ表ワセルヨウナ心地ス」ともある。1月10日にもパントマイムを見ている。それはテムズ南岸、下宿から遠くない Kennington Theatre という場末の劇場ではあるが、「キレイナルコト West End theatresニ譲ラズ。シカモ best seatニテスコブル廉価ナリ」とある。芝居の内容については「滑稽ハ日本ノ円遊ニ似タル所アリ、面白シ」という。「円遊」というのは、漱石の若いころステテコ踊りで人気をさらった落語家で、「鼻の円遊」などと呼ばれて滑稽落語で売りまくった。ロンドンの円遊が楽しめるとは、漱石の英語もたいしたものだ。2月にもここへ行っているが、「Christian トイウ外題ナリ。余り感服仕ラズ」とある。

'Metropole Theatre'にも3回ほど行っているが、これはハイド・パークの北東隣 Edgware Road にあった Metropolitan Theatre of Varieties のことであろうか。そこで見たという芝居は、*Wrong Mr. Wright* (滑稽芝居ナリ。徹頭徹尾オドケニテ面白キコト限リナク、シカモソノ滑稽タルヤ悪フザケニアラズシテ、興味モットモ多シ)、*In the Soup* (Ralph Lumley 作。滑稽ヲ無理ニ引キ上ゲテ膝栗毛的ナリ)、*The Royal Family* (スコブル面白カリシ) の3つである。

HippodromeというのはCharing Cross RoadのLeicester Square 近くにあったレビューが売り物の music hall で、「Cinderellaヲ見タ。獅子ヤ虎ヤ白熊ナドヲ見タ」とあり、「席ガナクテ5シリング払ッタ」ともある。ここは安い席は1シリングからあったようだ。6月にもう1度、クレイグ先生のところへ行った帰りに「Hippodromeニ至ル」とあるが、何を見たかは書いてない。「日本ノ軽業岡部一座アリ」とあるのがそれか。）

Music hall というのは今ではもうすっかり廃れてしまった variety theatre の俗称、日本でいう「寄席」のようなもので、歌舞音曲・曲馬・手品あるいは道化芝居などをとり混ぜて、一晩に14,5の出し物 (turn という) があった。時代は少し下るが、伊地知純正の本からそのプログラム (俗称 bill) を紹介する。これは West End の

上の部のものだそうである。(『倫敦名所図会』研究社、1918, pp.58-60.)

1. 幕開きの音楽
2. violin を弾きながら流行歌を歌う
3. 一幕物の芝居
4. comedian が諧謔を演じる
5. 自転車の曲乗り
6. アメリカ人が口笛で鳥の鳴き声をやる
7. 女性歌手の歌
8. 腹話術
9. スペイン人による舞踊
10. 幕間の音楽
11. Herculean athletes (兄弟2人で力業を演ずる)
12. フランス人女性によるバレエ
13. 女性歌手の歌
14. Yorkshire Comedian (お国なまりで笑わせる)
15. 活動写真 (その週の出来事を見せる)
16. 最後に国歌を奏して打ち出し

これで、当時のロンドンの寄席の雰囲気というものがだいたい想像できる。伊地知氏の留学当時 (1911-'13) はどこの寄席でも最後に活動写真を見せるのが通例であったらしいが、漱石がいたころ、映画がどのくらい普及していたかはよくわからない。

ところで、漱石は以上述べたごとくロンドンでは「滑稽芝居」ばかり見ていて、英文学専攻の留学生ならば必ず行くはずのシェイクスピア劇 (4月9日付の手紙には「LyceumでIrvingがShakespeareの*Coriolanus*をやる (新聞に) 出ている。見たいものだ。」とはあるが) などの舞台を見た形跡がほとんどないのはどうしたことであろうか。その理由はいくつか考えられようが、まず、そのような一流劇場は高くてなかなか行けなかったし、若い時分から歌舞伎よりは寄席を好んだ漱石には、本代を減らしてまでそういうものを見ておきたいという気にはなれなかったのかもしれない。それにまた、帰朝後の談話筆記「英国現今の劇況」(『歌舞伎』明治37年7, 8月号)でも語っているように、当時の演劇界は「脚本が良いとか悪いとかいうよりも、むしろ道具立てとか光線とか書割とかそんなものが主で」、低俗なメロドラマ・スペクタクルばかりが上演される、という傾向を知ってやがて演劇への興味を失っていったのかもしれない。

(付記) 引用文はいずれも現代表記に改め、句読点などを補ってあります。

大場建治『ロンドンの劇場』(研究社、1975)を参考させていただいた。

アメリカン・フォークロア (3)

—ユーモア話 1825年—1855年—

倉田 (ダイケストラ) 好子

1810年代からの約1世紀間、アメリカ国民は国内の発展に乗り出していた。そこには彼らの明白なる運命観と国家繁栄の気運が高くみなぎっていた。1828年のアンドリュー・ジャクソンの大統領への昇進は、平民がアメリカ生活の中心へ現われたことを象徴していた。西部においては、新しい州が投票権を持ってユニオンに入ってきた。東部においては、共和制のもとで公立学校が設立され、読み書き出来る中流階級が卒業して行った。アパラチア山脈辺境地の横断と、河川や有料道路の発展が物質的デモクラシーの範囲を広げた一方、ジャクソニアン思想は、政治的デモクラシーの基を築いて行った。Audubonの文にあるように、今や「アメリカの背景や性格の描写」に感応する新しい聴衆が生まれて来た。そしてジャクソンの勝利から、南北戦争までの30年間に、大衆のメディアは、これらの聴衆に地方色豊かなユーモア話を提供した。かくてフォークの英雄達は、都会のスラムと山間の奥地から登場して来たのであった。

1830年代において、田舎からの口承ユーモアを印刷のレベルにまで引き上げ、養成して来たその経路は拡張し、増加した。1825年に、はじめてヤンキー（東部人の役柄）は、ニューヨークの劇場において、Samuel Woodworthの『森のばら』の中で、ジョナサン・ブラウボーイとして主役を勝ち取り、その後つづいてヤンキーの主人公達は、ほこり高に舞台を大股に歩くようになった。1831年にPauldingの成功作、『西部のライオン』において、ニムロッド・ワイルドファイヤーとして、あらゐ熊の尾を帽子につけた咆哮者がはじめて舞台に登場した。また1831年に、*The Spirit of the Times* という週刊スポーツ紙の初版が出されたが、そのニューヨークの編集者、William T. Porterは、この週刊紙を来たる30年間ユーモアあふれる田舎のスケッチを載せた新しい種類の先きがけにしようとした。1835年に、“Georgia

Scenes” というそのような新聞のスケッチの初版の収集が、A. B. Longstreetによって出され、それは、後に安いペーパー・バックで主に出版された多くの似たような書物の先駆者となった。農夫の暦をもじった絵入りのデービー・クロケット (Davy Crockett 大佐は19世紀初期のアメリカのフォーク的英雄で国会議員にも選ばれた) の暦シリーズが、1835年にはじまり、たちまち全国に行きわたり、クロケットの名が広がった。アメリカの歴史上のどの時期においても、人気を呼んでいる口語りのユーモアがこれ程親しく、効果的にジャーナリズム、文学、舞台等の大衆文化と結びついたことはなかった。

新聞：特に1820年代には、日刊新聞の性格が変わって行った。18世紀の新聞は4頁に渡る良質の紙で、東海岸の都市で刷られ、教養ある上流向けで、その頁数の多くは、外国のニュースについてやされていた。ジャクソン流デモクラシーの出現で、個人的な雑談を載せた新聞があらわれて来た。その編者は私的あるいは個人的な物に興味を寄せ、自分の住む地域社会と密接に結びつき、ニュースと共に娯楽をも提供することを仕事と考えていた。当時は、ニュースを規格化する電信も、笑いやスリルを供給するラジオも、テレビも映画もなかった。そこでそういう新聞は、地口のなぞから多彩な人物素描に至るまで、ひょうきんなユーモアで満ちており、編者達は、お互いのニュース交換から一番良いものを常時取り入れる一方、地方からの寄稿をも望んでいた。良い話は各新聞をまわり、時には後日又くり返されたものである。“独創的な話”や“うまい話”は、報酬を欲しいままにした。

何百ものそういった種類の新聞のファイルはユーモア話を入れているが、次にあげるほんの一部の新聞しかいまだに注目されていない。それらは、セントルイス・リヴェイユ、ザ・ニューオーリンズ・ピュカタン、ザ・バーリントン・ヴァーモント、フリー・プレス、ザ・ノーウォーク、オハイオ、オブザバー、ザ・コロムブス、ジョージアとエンクワイア紙等である。

1824年から1850年にかけてGeorge Howardはフリー・プレス、ノース・カロライナやタルボロ紙等に出ているフォーク的な物を抽出し編集した。ハワードは長期間、ノース・カロライナの政治と法律にたずさわっていたので当時の読物を実例を用いて説明している。タルボロ紙の欄では、怪物の誕生から、巨大な動植物人間に至るまで自然の生み出す奇怪奇形なものを載せている。また愛人、夫婦間のいざこざから蛇や家畜に関する法螺話、はなれ枝や妙技、西部地方の誇張話、ヤンキーに関する多数の気のきいた話、死についての夢、愛人間のまじない、透視に関するもの、気味悪い天然現象、豊富な民間医薬

やにせ科学、何にでも効くいんちき万能薬等ももれなく載せられている。それにまた、ミズリーで死体に手を触れてその死体から血が流れるかどうかというテストが行われ、その結果容疑者は有罪と判決されたこと（死体に真の殺人者が触れるとその死体から血が流れると信じられていた）、またロッキングハムの魔術師は生き返ることを期待して、知人の家族の死体を家に保管するように説きつけたりしたこと等も出ている。植民地時代の伝統に従って行われたよっぱらい裁判もまだ見られたが、そこには当時の滑稽な疑似科学風のタッチが見られる。「自発的燃焼——ドラム酒を飲む人への警告」と題した詩は次のように結んでいる。

パイプに火をつけようと
かがんだ時、
偶然発火して、
アルコール性の彼の身は
自発的に燃えてしまった。

これらのニュース種やより抜き話等に交って民話が現われ出した。例えば黒人の方言による説教の変型で、どのようにして黒人が出来たかという話に、悪魔が神と張り合って、土から立派な白人の男を作った。苔を使って髪を作ったところが、自分の作品に嫌気がさし、作った男の向うずねをけてその鼻をなぐりつけた。（注——ある種の苔は黒人特有の短い縮れ毛を、そしてなぐられた鼻は黒人の平べったい鼻を連想させる。）

ミシガンは、アメリカ人愛好の法螺話の地である。その一つは、巨大な何匹かの蚊がやかんを下げて飛んで行ったという話であるが、そのやかんの中には、恐怖におののく男が隠れていて、落ちないようにやかんの中からハンマーで蚊の刺針をしっかりと締めつけていたという。

おとぎ話の大食家のパラダイスである架空の国、コケーニュは、大西部と結びつき、そこでは、豚の尻尾が豊饒な地に植えられ、そこから子豚の収穫があり、鋼鉄のくずからジャックナイフが飛び出たりする。その国では鹿でさえも、火を囲んでいる人々のもとへ塩の入ったバケツを尻に下げて運んで来、その尻肉が丁度良く焼けるように、火に背を向けて立つと言われている。

タルボロ紙や、フリー・プレス紙のファイルに見られるように、これら多数の滑稽談は、土地土地の伝説と見なされて日刊紙を通じて方々に散らばって行った。

1857年、1月27日のエクスペリメント紙、オハイオ紙やノーワーク紙に出た「いかにしてサンダスキーの人は飢饉から救われたか」という題の話は、パファロ・リパブリック紙に帰している。その話は、サンダスキーにおける飢饉についてのものだが、ひどいひでりで港の水

位が下り、船が入って来られなくなり、それに当時は、サンダスキーに入る陸路はなかった。やがて近隣の森から野性の豚どもが、湾の水を飲みにもチョコチョコとやって来たが、目の悪いリーダー格の1匹を除いて、皆その湾をふちどる細かい砂のために盲になってしまった。盲の豚の1匹がリーダーの豚の尻尾を口にくわえ、他の1匹がその豚の尾を同様にくわえるという風に、全部の豚がつながって行った。ある日、このように連なった豚どもが湾に下って行く途中、ある大胆なサンダスキーの男が、リーダーの豚の尾をめぐって発砲した。尻尾が身体から切断されたところへすかさず駆けつけ、第2の盲の豚がまだくわえていたリーダーの豚の尻尾を掴んで静かに引き出した。列車のように連なった豚どもは、そろそろと進み出し、その気転の利く射手は、一連の豚をとまって飢えている土地の人々のもとへと帰って行ったという。

この話は、地方色豊かなものにもかかわらず、はるばるヨーロッパからやって来た作り話で、猟人の大法螺として知られており、アメリカでも人気がある。

北ミシガンやメイン州の海岸地方にもこの話の変型がある。それはミシガンのアイロン河のアーロン・キニーが、最近の民俗学者 Richard Dorson に語ったもので、ある時、キニーが雌の大鹿が自分の尾で盲の雄鹿を引いているのを見た。そこで弾が一発しかなかったので、彼は先ず雌鹿をその一発の弾で射ち、雌鹿を雌鹿の尾で引いて町へもどり、そこで牛馬をつなぐ杭に雌鹿をつなぎ、ゆうゆうと近くの店に入って弾を買い、ゆっくりとその雄鹿を射ったという。

この種の新聞の話は、今ではもう口承の中には聞かれなくなったが、これらはまぎれもなく、当時の新聞のファイルに保存されている埋もれた滑稽談の一群である。今では忘れられたそのような法螺話の一つは、奥地での悪寒（おこり）と熱についての話を扱っている。1856年4月20日のニューオーリンズ・サンデー・デルタ紙は、メリーランド州のアン・アルンデル郡におけるひどい熱と悪寒について「あるふるえ」と題した話を載せている。それによると、当時、セヴェーン河近くで家を建てていた男達に悪寒が起こり、彼らのふるえで煉瓦が皆ふり落ち、またそのふるえで落ちた煉瓦はこなごなの塵芥となり、その結果2時間もの間、太陽を曇らせたという。またりんご採りのシーズンの時、農夫達は、ある奴隷をりんごの木に寄りかからせ、彼のふるえでりんごを落とさせたが、用意周到にも両側に1人ずつ男を配して、奴隷がりんごをふり落とし終って木を離れる時に、木そのものが倒れないようにしたという。またある少年が食卓につ

いた時に悪寒が起こり、彼のふるえて服についていたボタンもろとも、はいていたズボンまで落としてしまったという。

ウィーリングから、オハイオのザンズビルまで馬車で旅行していた、ジェームス・シルク・バッキンガムは、イリノイ河周辺で起こったおこりについての会話を立ち聞きした。1人は、おこりにおそわれた者がそのふるえて、自分の歯を全部ふり落としてしまったと言い、他の1人は、自分の服をふり落とし、あげくのはてに、その服の糸が一本一本抜けてしまったという。もう1人の友人は、彼のおこりのふるえて自分の家をふり落とし、廃墟にしてしまったと言っていた。この1842年に書かれた話は、実際にあったおこりの話のコンテストの様子をうまく捕えている。

上のような例は多数あり、セントルイス・ベナントからのもので、1840年にニューヨーク・スピリット・オブ・ザ・タイムスに出された“Sister Nance and the Ager”という話の中で、あるその土地の居住者が、教養ある旅行人に、尼ナンスを除いて、土地の人々には皆、その午後、おこりが起こる予定だが、尼ナンスはあまりにも意地っ張りなので、おこりもとりつかないし、よしんば起こっても、彼女はふるえはしないだろうと言った。この話は、ヨーロッパの意地っ張り女房の話を想い出させる。その女房は河に落ちて溺れるのだが、その死体を探すにあたって、彼女の夫は、自分の妻はあまりにも意地っ張りなので、流れに沿って流れはしまいと思って、川上へ探しに行ったという。また1852年に同紙に載った「悪寒と熱」という話は、以前ズボンをふり落として火の中に入ったというテネシーの居住者が、如何にして彼の息子のふるえを止めたか等について語っている。これら新聞に出ている雑談の類は、以前盛んに語られ、今は忘れられている、奥地方の法螺話のテーマを再現してくれる。

週刊誌：ある特殊のユーモラスな週刊スポーツ誌が1800年前後にあらわれ、当時で最も独創的な寸描を載せている。その体裁は新聞より大きいもので、内容においては、雑誌に近いものだった。最も有名なのは、ザ・ニューヨーク・スピリット・オブ・ザ・タイムスとボストン・ヤンキー・ブレードの2誌であった。——この外にもあまり知られていなくて長続きしなかったものもあったのだが——前2者は、主にスポーツ好きな上流階級や、市町の紳士達によく受けた。1831年に、ザ・スピリットをはじめたポーターは、競馬、ニューヨークの劇場、餌や釣等、男性向き娯楽に関係したトピックを扱っていた。彼の扱うページには、奥地を背景にして餌やキ

ャンプ生活を描く、スポーツマンによって書かれた記事が増えて行った。やがてそれらは、辺境地の人物や風習のスケッチに強調点が集まり、形式も率直な観察から、もっとユーモラスな想像力あふれる描写へと移って行った。スピリット誌のライバルは、地方の文学的、家庭的新聞から発展したブレード誌であったが、その初版は、1841年にメイン州のウォータービルにおいて、全盛期の1847年から56年にかけては、ボストンにおいて出されている。その出版者、William Mathews は、ハーバード大卒業の弁護士で、後にシカゴでジャーナリストとして活躍した。また文学とレトリックの教授にもなり、独立や自立等をテーマとした著書の多い人気作家でもあった。

(次号へつづく)

(関西外国語大学教授)

(Continued from p.5)

the dictionary, which interrupts a chain of thought and often misleads because it assembles all of a word's meanings and gives them to us all together.

And so walks and hikes and romps in the woods of English are worth the effort. The traps and pitfalls are best forgotten in the roaming. There's Mother Goose with its frolics and flights and sober wit—a splendid language lesson. There's Eugene Field and Lewis Carroll, Mark Twain and Oscar Wilde, Benjamin Franklin and Charles Darwin, Edith Wharton and Charles Dickens, Herman Melville and Joseph Conrad, Sarah Orne Jewett and George Eliot, Emily Dickenson and A. E. Housman, Ernest Hemingway and Muriel Spark. The list is almost endless, and there is something for every taste and mood. Effort is called for, but pleasure, not pain, should be the spur. Beginning is all. Then sooner or later a time will come when to one's own surprise something that once seemed hard and unapproachable is easy, familiar—and above all enjoyable.

(Consultant, Council on International Educational Exchange)

TRADITION AND MODERNITY AMONG CONTEMPORARY NATIVE AMERICANS¹⁾

Donald D. Stull

Assistant Professor

Dept. of Anthropology, University of Kansas

PROLOGUE

Persons, both Indian and non-Indian alike, often assume that Native American culture is frozen in time—fixed and unchanging at some point in the distant past. While they recognize that Indian people still exist, they tend to assume that these people are no longer bearers of a "real" Indian culture. To the non-Indian, this "real" culture is all too often composed of paint, feathers, and thundering hoofs; while to the Indian (and often the anthropologist) it usually involves what is referred to as "traditional culture" or the "old ways." However, what persons unfamiliar with contemporary Native Americans generally fail to realize is that tribal and peasant populations throughout the world are undergoing rapid and often massive change which will result in these societies manifesting cultural configurations which more closely approximate those of Euroamericans. Social scientists have referred to this process as "acculturation," or more recently "modernization."

TRADITION AND MODERNITY: THEORETICAL CONCERNS

Before proceeding to a discussion of tradition and modernity in contemporary Native American culture, it is necessary to briefly

discuss the theoretical views of the processes that have created this dichotomy. As noted above, the massive changes that are occurring in native cultures throughout the world have been classified by social scientists under the rubrics of "acculturation" and "modernization." Although many anthropologists would assert that they are one and the same thing, I feel that it is necessary to distinguish between the terms.

"Acculturation" here refers to the transmission of cultural elements through continuous firsthand contact between groups with different cultures, with one of the groups usually having a more highly developed technology. Although the process is bilateral, it is usually characterized by a greater transmission of traits from the dominant (with the more highly developed technology) to the subordinate group. Thus the end product of acculturation is a recipient (subordinate) group whose culture more closely approximates that of the donor. Theories of acculturation have been greatly influenced by developments arising out of contact between colonial powers and native peoples. However, it should

1) Research upon which portions of this paper are based was partially supported by funds from National Institute of Mental Health grants MH 8150 and MH 17053, Robert A. Hackenberg, principal investigator; Kansas Committee for the Humanities grant, Ellen F. Reynolds, project director; and University of Kansas Small Grant 3600-60-0038 and General Research Grant 3484-20-0038 awarded to the author.

be noted that the dominant-subordinate relationship which has characterized acculturation in these situations, need not be true of acculturation per se (Dozier 1951)².

In contrast to acculturation, "modernization" refers to a change process which results in increased cultural complexity (increased complexity may or may not occur in acculturation). While modernization may derive from direct contact with a specific group, this need not be the case (e.g., indigenous development, exposure to mass media without first-hand contact, contact with several groups). Modernization, then, need not involve a movement toward greater similarity with any given culture. Therefore, acculturation is a culture-specific process while modernization is not. It should also be noted that modernity is relative. Today modernism is usually equated with the Euroamerican culture patterns, while 2000 years ago Hellenistic culture epitomized modernity in the Western world.

The term "modernization" is used in the literature in two distinct ways. On the one hand, it is used to describe the properties of groups (e.g., communities, nations), and is characterized by features such as bureaucracy, secularization, market economies, high levels of education, and occupational specialization. On the other hand, the term "modernization" (or "modernism") has come to be used more frequently to describe the properties of individuals, who are undergoing changes necessary to live in modern industrialized societies. Individual characteristics which are generally associated with modernism include socioeconomic mobility, knowledge of a wider environment, escape from kin-group obligations, increased educational attainment, and receptivity to rapid change. While it is unfortunate that the same term has been used to describe processual activities at two different phenomenological levels, there is little doubt that such changes do occur at both levels. However, it should be emphasized

that the processes, whatever we call them, are distinct—the "modern individual" cannot be deduced from the "modern community" (Stull 1973:14; 1978a:131).

This dichotomy between "traditional" and "modern" groups/individuals which has been presented in the literature has in many ways fostered the fallacious notion of fixed, unchanging native culture alluded to above. Traditional culture is not static and, in fact, what we call traditional culture is often the product of change (Gusfield 1967). Certain Native American religions which are today considered "traditional", such as the Native American Church and the Code of Handsome Lake, originated as nativistic reactions to contact with Euroamericans. Furthermore, the adoption of new cultural elements does not necessarily require the abandonment of traditional culture; thus, the process may, in fact, be additive, resulting in what one author has called the "150% man" (McFee 1968). In addition, researchers in this field have concluded that individual modernization is comprised of distinct components which are derived from many causes, and that its elements often appear at different rates (Lerner 1958; Stephenson 1968; Inkeles 1969; Schnaiberg 1970; Stull 1973). Finally, it has been found that whether an individual manifests "modern" or "traditional" behavior may be a result of situational factors—an individual will in certain social settings behave as a "traditional" while in other settings as a "modern" (McFee 1968).

The point of this very brief and sketchy review of current thinking regarding tradition and modernity is to make it clear that while it may be possible to classify social

2) In fact, much acculturation has occurred between Native American populations themselves. For example, items of native dress (war bonnets, feather dance bustles), food (fry bread, etc.), music and dance (pow-wows, 49'ers, numerous songs), religion (Native American Church), and so forth have diffused widely from their points of origin. Certain elements have become so widespread that it is safe to refer to them as being "pan-Indian".

groups along a continuum from traditional to modern, at the individual level the issue is far more complex. Bearing in mind this caveat, I wish to proceed with an overview of tradition and modernity in contemporary Native American culture³⁾.

TRADITION AND MODERNITY: CONTEMPORARY NATIVE AMERICANS

The views expressed in this paper stem in large part from fieldwork among two widely separated and very different Native American populations—urban Papago of Tucson, Arizona and reservation Kickapoo in north-east Kansas. If there is, in fact, a meaningful continuum along which the modernization of American Indian tribes can be located, the Papago of southern Arizona certainly occupy a position near the bottom, along with the Hopi, Zuni and a handful of other groups occupying remote homelands (Stull 1972:229). In contrast, the Kickapoo of Kansas have been subject to intense acculturational pressures from both the dominant non-Indian society and other Native American groups as well for over a century. Traditional culture, as measured by native language retention, the presence of traditional religion, marriage and kinship patterns, and so forth, is still quite pronounced among the Papago (both on and off the reservation). In contrast, traditional culture among the Kansas Kickapoo, while still present, is much less viable, being retained primarily among the elderly⁴⁾.

Among persons familiar with contemporary Native American affairs, the terms "traditional" and "modern" have a familiar ring, as do the roughly synonymous terms, "conservative" and "progressive"; "full-blood" and "mixed-blood". These terms tend to be used interchangeably with tacit assumptions as to their definition and the kind of individuals who belong in each category which can often result in people using the same terms to talk about very different phenomena⁵⁾. A major

reason for confusion in the usage of these terms can be found not only in the phenomena themselves, but also in the philosophical and theoretical orientation of those who employ the terms. Many persons would prefer to reserve the term "traditional" for those cultural elements and patterns which were present during the precontact period. If one adheres to this viewpoint, then very little of the content of contemporary Native American culture is traditional.

For example, among the Kansas Kickapoo there are presently three "traditional" religions—the Native American Church, the Drum Religion, and the Kennekuk Church. All three of these religions arose in the 19th and early 20th Centuries as nativistic responses to contact with Euroamerican culture. The aboriginal religion, based primarily on clan bundles, has largely disappeared as an organized system of belief, surviving largely in the area of witchcraft belief (Stull 1978b; Landes 1963). This is not to say that aboriginal Kickapoo religious beliefs and behaviors are no longer present. The extant religions are, in fact, syncretic, being the results of the combining of aboriginal and Christian elements (Landes 1963; Howard 1965; Bee

3) Throughout the rest of this paper, the terms "traditional" and "modern" will refer to the properties of individuals.

4) The examples I use of tradition and modernity are drawn from field experience with the Papago and Kansas Kickapoo, and thus should be strictly taken to apply only to those groups. Nevertheless, these groups are, I believe, representative of the issues regarding tradition and modernity among Native Americans by and large; therefore, a certain amount of cautious generalization is warranted.

5) For example, in discussions of "full-bloods" versus "mixed-bloods" it is logical to assume that the distinction is a biological one, and in fact, centuries of contact between Euro- and Native Americans have led to the emergence of distinctive intermediate populations in the New World (referred to as mixed-bloods in the United States; Métis in Canada; and Mestizo in Latin America). However, the distinction normally applies to social and cultural differences which may only incidentally correlate with biological distinctions. It is not uncommon for persons who are biologically mixed-bloods to be considered culturally as full-bloods and vice versa.

1966). While these religions have incorporated varying amounts of non-Indian beliefs and practices they, nevertheless, serve to maintain a distinctive Kickapoo or, perhaps more general, Indian culture. While "purists" might deny that the above religions are "traditional", most students of contemporary Native Americans hold the view that beliefs and behaviors which maintain distinctive tribal or Indian identity are, in fact, traditional. This is certainly the predominant view among Native Americans themselves.

If one adheres to the definition of "traditional" culture proposed above, then the locus of traditional culture among contemporary Native Americans lies primarily in native language and religion, although such "pan-Indian" activities as pow-wows should also be included. Given the history of Indian-Euro-american relations, it is not surprising that native language and religion are synonymous with traditional culture. The United States government's (and its colonial precursors') consistent attempts at "civilizing" the Indian have been primarily directed toward eradicating native language and religion. The fact that native language and religion have been viewed as the locus of traditional culture by the dominant society, and thus the main focus of acculturational pressures, has contributed to their equation with traditional culture by the native populations themselves. The fact that language and religion are inherently conservative institutions and among the most resistant to culture change (as compared, for example, with technology), coupled with the dominant society's preoccupation with the eradication of these institutions, has reinforced attempts to retain them as symbols of group identity and autonomy.

Native language and religion have become so intertwined that it is difficult to speak of them as separate entities. There is a marked tendency among traditionalists to consider native language as a necessary component of

traditional religion. The fact that competence in the native language is generally waning among the younger generation is a source of great concern among traditional religious leaders. Many feel that traditional religion cannot be maintained if the native language disappears. This attitude is also present among those who are monolingual in English, both young and old (Stull 1978b). Whether this is, in fact, the case remains to be seen for many groups (to a large extent, it may depend on the traditional language in question).

A corollary of the view that native language is essential to traditional religion, is the tendency to increasingly sanctify other elements of traditional culture. It is an anthropological truism that the boundaries between cultural institutions, such as religion, economics, politics, social structure, and so forth, are not as clearly delineated among non-Western peoples as they are in the Western tradition. Institutional overlap has always been pronounced among Native Americans. However, traditional culture in its entirety is coming to be viewed as sacred by contemporary Native Americans. This redefinition is spreading to cultural elements which in the past could often be classified as secular, such as native house-types, foods, and so forth.

This tendency seems to be most pronounced among the groups where traditional culture is the weakest. Where elements of traditional culture are being undermined or disappearing, group members often attempt to retain them either by redefining them as sacred or else by reemphasizing their sacred nature. This process of sanctification is often rationalized by the "myth of the noble red man", or perhaps more accurately, the "myth of the sacred red man". In this regard, the assertion is made that native culture has always been predated by the sacred, and current group members are merely carrying on with an established view of their culture and the world around them.

While there is much truth to the assertion that the sacred permeated native culture in the past, there, nevertheless, seems to be an increased tendency to sanctify native culture whenever it is threatened. This process is quite evident in a comparison of the Papago and the Kansas Kickapoo concerning their knowledge of, and willingness to discuss traditional culture with outside investigators. The Papago, although there is a reluctance to discuss certain aspects of native religion characteristic of all American Indians (due largely to religious suppression), are on the whole willing to explain in detail traditional culture (including much of the religion) to the sympathetic outsider. Furthermore, knowledge of native language and participation in traditional culture is pronounced among the young. It should be noted that the Papago are among the most frequently studied of all American Indian groups, and one could thereby reasonably assume that they would be resentful of the steady stream of "nosey outsiders" asking the "same old questions". Yet inquiries regarding traditional culture, and even participation in many aspects of it, have been allowed with little overt resentment to myself and many other anthropological investigators.

Among the Kickapoo I have found, in many respects, a quite different situation. My relationship with the Kickapoo has been one of explicitly working with the tribe to collect data on traditional culture and to aid them in maintaining and/or reviving portions thereof. While I have encountered little overt resistance (Indians are rarely overtly hostile or rude), I have, nevertheless, found a reluctance on the part of traditionalists to freely discuss such topics as religion in spite of the fact that the material is to be used by the tribe itself. In fact, one major religious leader told me that there is a divine sanction against writing the

religion down. I consistently had difficulty in eliciting information on what are generally "secular" topics (e.g., house construction, etc.) because they are coming to be defined as "sacred" and thus inappropriate to discuss with an outsider. This reluctance to discuss traditional culture with outsiders even extends, to some degree, to their own younger generation. Many elders feel that the young are not genuinely interested in learning and preserving the traditional culture; therefore, they often feel that it is better to let it die rather than alter its content and/or mode of transmission (e.g., for oral to written) in order to suit the needs and demands of the young. While the majority of the younger generation are positively inclined toward traditional culture, it survives among them in a rather truncated form, in bits and pieces rather than as a viable, coherent system⁶⁾.

The reader should be cautioned that the above assertions regarding the negative relationship between the strength of traditional culture and a tendency to increase its sacredness, are quite tentative and, therefore, require further study. However, there is little question that it is becoming more difficult for anthropologists and other outside investigators to study traditional culture. Vine Deloria's attack on "anthropologists and other friends" in *Custer Died for Your Sins* (1969) merely brought to the surface a long standing resentment on the part of Native Americans. Unlike early anthropologists, such as Frank H. Cushing among the Zuni (Gronewold 1972), contemporary anthropologists are finding investigations of traditional culture increasingly difficult. This attitude stems in large measure from the feeling that such studies have had little

6) In passing, it should be noted that this reluctance to discuss traditional culture is not a result of saturation from outside investigators—the Kansas Kickapoo have been almost completely ignored by anthropologists.

practical benefit for the Indian people themselves. This "none of your business" attitude has resulted in a growing insistence on problem-oriented research which will provide Indian people with a practical body of knowledge which they can use as they see fit. As a result, research concerning traditional culture, while still being done, is now more likely to be undertaken under tribal control, and for pragmatic purposes such as bilingual/bicultural programs.

The emergence of "native anthropologists" (members of native populations who receive formal training in anthropology) is a related development⁷⁾. Anthropologists are often rightly criticized for gross inaccuracies in their descriptions and understanding of native culture. Native anthropologists, as a result of their enculturation in both the native culture and the discipline of anthropology, have often provided us with a clearer picture of traditional culture (e.g., Ortiz 1969; Dozier 1970). Both of these developments, greater control over research activities and orientations by the Indians themselves and the emergence of native anthropologists, are healthy developments which will ultimately result in improvements in our understanding of Native Americans.

One further point needs to be made concerning tradition and modernity among contemporary Native Americans. Knowledge of, and participation in, "traditional culture" is becoming increasingly characteristic of "modern" Native Americans. The growing awareness and pride in ethnic heritage which has been part of the civil rights movement has been keenly felt among Native Americans. In all sectors of Native American culture— young and old, reservation and urban, "traditional" and "modern"—the revitalization of native culture is underway. This development

is evidenced by the emergence of bilingual/bicultural programs both on the reservations and in the cities, "survival schools" (teaching native language/culture apart from, and as an alternative to, public education), and heightened political activism focusing on such issues as treaty rights (e.g., "The Longest Walk").

This revitalization of traditional culture does not represent a denial of the realities of life in the modern world and a "return to the blanket". Native Americans are very much aware that they must adapt to the non-Indian society and, indeed, they do not wish to reject its positive qualities (e.g., educational and health services, housing, etc.). Instead, they are consciously choosing to adopt certain elements of the non-Indian culture so as to better retain and protect traditional culture. This trend is most obviously (and perhaps successfully) seen in the sophisticated use of the judicial system to retain or reinstate rights or lands guaranteed under treaties with the federal government (the recent return of the sacred Blue Lake to the Indians of Taos Pueblo, New Mexico; the numerous legal battles surrounding the use of peyote by members of the Native American Church; etc.).

The adoption of certain elements of the non-Indian culture so as to insure the survival of valued elements of native culture is not new to Native Americans. In the early 19th Century the "Five Civilized Tribes" (Cherokee, Choctaw, Chickasaw, Creek, and Seminole) consciously adopted much of non-Indian "civilization" (writing system, public schools, constitutional government, slavery, etc.) so that they might better retain their cultural autonomy (Spicer 1969). This borrowing was adapted to their needs and integrated with the existing culture and, thereby, avoided the traumatic results which generally accompany forced acculturation. While the Five Civilized Tribes (and many other cases too numerous to

7) The field has always had a few "native anthropologists"; however, their numbers have markedly increased in recent years.

mention) indicate that this selective borrowing, coupled with a vigorous retention of native culture, has always been present, recent years have seen a renewed determination to retain and strengthen traditional culture among Indian people throughout the country. This development promises to strengthen their centuries-long battle to retain cultural autonomy in the face of a consistent governmental policy of ethnocide and genocide.

SUMMARY

In closing, I feel it necessary to briefly summarize the main points of the discussion. First, traditional culture, although conservative by nature, is never static, but rather continually adding and deleting elements. Second, the distinction between "traditional" and "modern" individuals is not a clear-cut, either/or distinction. The adoption of modern cultural elements does not require abandonment of the traditional—persons may manifest modern or traditional behaviors in different areas of their lives and in different situations. Third, the locus of traditional culture among Native Americans is to be found largely in native language and religion. Fourth, it is suggested that where traditional culture is weakening, there is a tendency to sanctify previously secular elements. Finally, a resurgence in traditional culture is currently occurring among Native Americans, thus further blurring the distinctions between tradition and modernity. In other words, to be a "modern" Indian today is to be "traditional".

REFERENCES CITED

- Bee, R. L.
1966 Potawatomi Peyotism: the influence of traditional patterns. *South-western Journal of Anthropology* 22 : 194-205.
- Deloria, V., Jr.
1969 *Custer Died for Your Sins*. London: Macmillan.
- Dozier, E. P.
1951 Resistance to acculturation and assimilation in an Indian pueblo. *American Anthropologist* 53 : 56-66.
1970 *The Pueblo Indians of North America*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Gronewold, S.
1972 Did Frank Hamilton Cushing go native? In S. T. Kimball and J. B. Watson (eds.), *Crossing Cultural Boundaries*. San Francisco: Chandler Publishing House, pp. 33-50.
- Gusfield, J. R.
1967 Tradition and modernity: misplaced polarities in the study of social change. *American Journal of Sociology* 72 : 351-362.
- Howard, J. H.
1965 *The Kenakuk Religion*. An early 19th Century revitalization movement 140 years later. *Museum News, South Dakota Museum*, Vol. 26, Nos. 11-12.
- Inkeles, A.
1969 Making men modern: on the causes and consequences of individual change in six developing countries. *American Journal of Sociology* 75 : 208-25.
- Landes, R.
1963 Potawatomi medicine. *Transactions of the Kansas Academy of Science* 66 : 553-599.
- Lerner, D.
1958 *The Passing of Traditional Society: Modernizing the Middle East*. New York: The Free Press.
- McFee, M.
1968 The 150% man, a product of Blackfoot acculturation. *American Anthropologist* 70 : 1096-1107.
- Ortiz, A.
1969 *The Tewa World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Schnaiberg, A.
1970 Measuring modernism: theoretical and empirical explorations. *American Journal of Sociology* 76 : 399-425.
- Spicer, E. H.
1969 *A Short History of the Indians of the United States*. New York: D. Van Nostrand.
- Stephenson, J. B.
1968 Is everyone going modern: a critique and a suggestion for measuring modernism. *American Journal of Sociology* 74 : 265-275.
- Stull, D. D.
1972 Victims of modernization: accident rates and Papago Indian adjustment. *Human Organization* 31:227-240.
1973 Modernization and symptoms of stress: attitudes, accidents and alcohol use among urban Papago Indians. Ph.D. Dissertation, University of Colorado. Ann Arbor, Michigan: University Microfilms.
1978a Native American adaptation to an urban environment: the Papago of Tucson, Arizona. *Urban Anthropology* 7 : 117-135.
1978b Field notes. Kansas Kickapoo study.

Emily Post

よく使われる人名のいくつか (その2)

矢野文雄

“Why did you phone Sabbath tonight?”

Ching swung around. His eyes probed the Inspector's. “Why shouldn't I? And just what did happen up there anyway?”

“He was murdered too. Why did you phone him?”

Ching Wong Fu looked from Gavigan to Merlini, and back at Gavigan. I felt that somewhere behind his astonished face some fast thinking was going on.

Merlini helped out. “The inquisitive gentleman is Inspector Gavigan of the Homicide Squad. I think **Emily Post** would I advise, in such circumstances, that you overcome your natural shyness and provide answers.”

(*A Death From a Top Hat* by Clayton Rawson, 1938)

初めて会った男からいきなり「今夜、サバットにどういう用事で電話をかけたのか」と聞かれ、びっくりした顔をしているチンに、メリーニが「場合が場合だから、下駄な質問にも答えるようになって Emily Post だってアドバイスすると思うよ」というようことを言っている。

また、Rex Stout のデビュー作である *Fer-De-Lance* (1932年) にも次のような個所がある。

Wolf said, “Good morning, Friend Goodwin.”

“What?” I stared. “Oh, I get you.” I had left my hat on. I went to the hall and tossed it on a hook and came back. I sat down and grinned.” I wouldn't go sour now even for **Emily Post**. Didn't I tell you Manuel Kimball was just a dirty spiggotty? Of course it was your ad that did it.”

帽子を被ったまま事務所の机に向かっている助手のアーチャーがウルフ探偵にたしなめられているところ。アーチャーもご機嫌がいいせいか Emily Post に悪態をつく気にもならないらしい。

この両方の例に出てくる Emily Post は、マナーに関して口になされていることから推測できるように、マナーとエチケットの最高権威と見なされて来た人である。

Webster's Biographical Dictionary は

Emily Post (1873—1960)—American writer and Columnist, born Baltimore, Md.; contributor to newspapers and magazines, esp. of articles on manners and social etiquette; author of *Etiquette* (1st ed., 1922), and other books.

と紹介している。

著書の *Etiquette* はマナーとエチケットに関する教典とされて来たが、1922年に初めて出版された時は *Etiquette in Society, in Business, in Politics and at Home* という非常に長ったらしいタイトルだった。1928年からは *Etiquette, the Blue Book of Social Usage* とやや短いタイトルになり、1968年から単に *Etiquette* となったものである。

Emily Post がマナーとエチケットの権威としてどんなにもはやされたかは Emily Post says~ という表現が生まれたという事実からもうかがい知れよう。Stuart Berg Flexner の *I Hear America Talking* (1976年) がその背景を上手に説明しているので、あえて幾分の重複を承知の上、引用させてもらうことにする。

Emily Post Says... has been an American expression ever since the Baltimore-born, New York socialite Emily Post (1872—1960), became the arbiter of polite manners with the publication of her book *Etiquette* (often called “The Blue Book of Social Usage”) in 1922. Daughter of the eminent architect Bruce Price, she married Edwin Post at 20 and soon found it necessary to supplement her income, which she did by writing light, polite magazine pieces and several novels about Americans in Europe (her 1904 *The Flight of a Moth* is her best known).

After her *Etiquette* appeared the many letters she received asking for advice about specific social situations led to her writing a popular syndicated newspaper column and giving a successful radio show. Her book became very popular because it came out during a time of increasing prosperity, when millions of Americans felt themselves moving up the social ladder, and also because it was the first modern etiquette book written for the average person rather than for the upper classes. Her oft-quoted underlying rule was the democratic “consideration for others.” Thus, since 1922 we have been settling etiquette debates by

saying "Emily Post says..."

生年にずれがあるがそのままにしておく。Emily Postがいかに多く人の信頼を勝ち得たかが分かっていうものだ。

なお、Emily PostはMiss Postとして引用されることもあることを次の例が教えてくれる。

He kissed her angrily on the lips and took off, sailing down the stairs.

"Come in, Celeste," said Ellery.

Celeste went crimson. She came in fumbling for her compact. Her lipstick was smeared and she kept looking at in her mirror.

"I don't know what to say. Is Jimmy plastered? This early in the morning?" She laughed, but she was embarrassed and, Ellery thought, a little scared.

"Looked to me," said the Inspector, "as if he knew just what he was doing. Hey, Ellery?"

"Looked to me like the basis for a nuisance charge."

"All right," laughed Celeste, eying the repairs. "But I really don't know what to say." She was dressed less modishly this morning, but it was a new dress. Her own, thought Ellery. Bought with Simon's money.

"It's a situation not covered by Miss Post. I imagine James will go into it in detail at the first opportunity."

(*Cat of Many Tails* by Ellery Queen, 1949)

部屋から出て来たジェームズにいきなりキスされたセレスト嬢がMiss Postもこんな場合のことには触れていなかった、とどぎまぎしながら言ったというわけだ。

ところで、Emily Postはアメリカだけで有名だったわけではなく、もちろんイギリスでもよく知られていた。そうでなかったらイギリスのP. G. Wodehouseが*Quick Service* (1940年)の中で次のように使うことはなかったはずであろう。

Lord Holbeton could sympathize with the honest fellows. He did not like Mr. Steptoe's manner himself. There had been something in the nature of an informal understanding, when he had come to stay at Claines Hall, that he should take his host in hand and give him a much-needed spot of polish. But so unpleasant had been the spirit in which the other had received his ministrations that he had soon abandoned his missionary work. Mr. Steptoe, when you tried to set his feet on the path that led to elegance and refinement, had a way of narrowing his eyes and saying "Ah, nerts!"

out of the corner of his mouth, which would have discouraged Emily Post.

Emily Postも眉をしかめるような悪いマナーだと言っているわけだから、Emily Postがマナーとエチケットの権威であることを認めた上でのことである。

Emily Postが亡くなってから孫の嫁にあたる Elizabeth L. Postが*Etiquette*を改訂し、1975年に*The New Emily Post's Etiquette*というタイトルで出版し、Emily Postの名前は現在でもマナーとエチケットの権威者として認められている。

*The Japan Times*の1977年6月6日号に*Los Angeles Times*のRobert C. Tothの署名入りで次のような記事が出ていた。ソ連もついに西欧のマナーとエチケットを理解しようとし始めたことを報道したものである。

Emily Post May Be Bourgeois but Soviets Want To Know at Least Something About P's and Q's

Moscow—The Russians have begun to worry about minding their Ps and Qs after years of revolutionary disdain of etiquette as petty bourgeois pretention.

"Interest in etiquette today is more extensive than ever," a *Literary Gazette* article said a few months ago. But guides on the subject are almost unavailable. A few books are published but in "minute editions," the article complained, and even most of those are translations of foreign works.

(中略)

Emily Post, the *Literary Gazette* admitted, can teach Russians a good deal, but her books have "a bourgeois tone (which) makes them largely unsuitable for our conditions...."

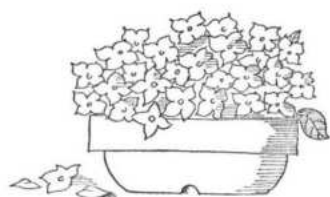
"Now the newly cultured social strata (here) have come to realize that the old etiquette was not entirely nonsensical but no one has yet drawn up the modern guide to etiquette that we need," it added in a frank discussion of the subject.

ロシア人もEmily Postから学ぶことが多いことも確かだが、彼女の説くマナーとエチケットはブルジョア向けのものなので、その大半はプロレタリアートばかり(?)のロシア人には適していない、というあたりはなかなか面白い。

こういった場合に持ち出される名前がいぜんとして、Emily Postなのだから、マナーとエチケットの権威としての名は不滅といってよいようだ。

(英語/ミステリー研究家)

外国語学習の環境



ELEC 情報・資料の収集および分析研究グループ

大塚達雄

複数の言語が存在し、かつ実際に話されているアメリカやカナダといった国では、英語ばかりではなく他の言語をも使用する二重言語教育(bilingual education)が重要な課題となってきた。またさまざまな国から次々と流入してくる移民の子弟に対する英語教育も依然として重要な問題である。このような状況は、わが国では、海外からの帰国子女の教育といった例外的な場合を除いてあまり注目されることはない。しかしながら、母国語以外にもう一つの言語を学習させるという点で日本における外国語教育に相通じる課題をそこに探し出し得るし、またアメリカやカナダで行なわれている試みからわれわれが外国語教育に対するさまざまな示唆を得ることができると思われる。このような点を踏まえて、本稿では、H. H. Stern, "Bilingual Schooling and Second Language Teaching: A Review of Recent North American Experience" および Thomas M. Hale and Eva C. Budar, "Are TESOL Classes the Only Answer?" を、第二言語(second language)の習得という点に焦点をあてて紹介するものである。両論文とも *Focus on the Learner: Pragmatic Perspectives for the Language Teacher* (John W. Oller, Jr. および Jack C. Richards 編, Newbury House Publishers, Inc., 1973) に掲載されている。なおこの本には上記の論文の他に、言語学習のさまざまな分野にわたって数多くの興味深い論文が収められている。目次の大項目として次のような分野が挙げられている。

- PART I The Relevance of Linguistics and Psychology to Language Teaching
- PART II Language Learning Processes
- PART III Aspects of Second Language Learning
- PART IV Aspects of Testing
- PART V Sociocultural and Motivational Factors
- PART VI Alternatives to Formal Language Instruction

上記の論文は、最後の PART VI に含まれる 4 つの論文のうちの 2 つであり、それぞれ pp. 274-282, pp. 290-300 である。

〔1〕二重言語教育

アメリカにおける典型的な二重言語教育では、子供達の住んでいる土地の言語、たとえばスペイン語、フランス語、ナバホ語¹⁾によって学校教育の初期の段階の教育が行なわれその後徐々に英語が導入されてくる。したがって、二重言語教育の原型は母国語の維持と発達を目的とすると同時に、英語を学習する機会を与えることにある。カナダでは、二重言語教育を考える場合に、その主要な対象となる言語は英語とフランス語である。Stern は、アメリカとカナダにおける二重言語教育の背後にある人種的、社会的、政治的諸問題に言及したあと、モントリオールで Lambert が中心となって行なった実験を紹介している。この実験では、学校教育の最初の 2 年間は英語はまったく用いられず、幼稚園と第一学年は、フランス語を話す先生によってフランス語だけで大胆にも教育が行なわれ、英語はこの最初の 2 年間が経過して初めて教育の手段として徐々に導入されその使用が増やされていったのである。このように 2 か国語によって教育を受けた子供と、モントリオールの同じ地域でフランス語か英語かどちらか一つの言語で教育を受けた子供とを比較してみると、その結果はこの 2 か国語教育プログラムを非常に勇気づけるものであった。このプログラムで教育を受けた子供達は、「4 年もしくは 5 年過ぎた後、英語を読み書き、話し、理解し、そして使用することにおいて、通常の方法で英語によって教育を受けた子供達と比べて遜色がない」ように思われる。「さらに、何の犠牲を払うこともなく、彼らはフランス語を読み、書き、話し、そして理解することもできるのであって、それは母

1) 北米インディアン語の中の一つ。

〔2〕移民の子供達の英語習得

ハワイはアジアや太平洋諸国からの数多くの移民をかかえている。彼らの子弟の英語習得の実態と、英語教育がいかになされるべきかを扱ったのが、Hale および Budar の論文である。この実態調査の対象は、中等学校(第7学年から第9学年までの intermediate school および第10学年から第12学年までの high school) で TESOL⁵⁾ プログラムのある学校とない学校に通っている、英語を母国語としていない生徒である。また、この調査の目的は、どういう生徒が首尾よく英語を学習しているか、そしてそれはどういう環境においてであるか、という疑問に答えようとしたものである。調査の方法は、面接および筆記試験であり、学業成績の平均値も考慮に入れている。なお、調査の時期は1970年3月である。

面接

すべての学生が面接を受け、これまでの経歴、家族、家庭で用いている言語、社会生活で用いている言語、好みの映画の種類、故国でどのくらい英語教育を受けたかといった一連の一般的な質問に答えるように求められた。生徒が試験官の質問を理解したように思われる程度により、そして試験官が生徒の答えを理解した程度により、ゼロから3までの成績がつけられた。ゼロは、生徒が英語を口頭により理解し使用する能力がまったくないことを示し、3は英語が容認しうる程度は流暢であることを示す。なお、この面接はすべて同一の試験官によって行なわれた。

筆記試験

すべての生徒は A. L. Davis が開発した Diagnostic Test for Students of English as a Second Language を受けた。これは150項目の多項式選択テストで、英語の主な文法事項を使用する能力を調べるものである。

以上の調査の結果、次のようなことが判明した。もし生徒が面接で2以上の点を取り、また上記の Davis Test

2) この点に関しては、『英語展望』No. 69 (Spring, 1980) の有元将剛氏による「外国語学習開始の時期」(p. 48) をも参照されたい。

3) "An Approach to Bilingual Education: The St. Lambert Experiment," in Swain, M (ed.) *Bilingual Schooling: Some Experiences in Canada and the United States*, Toronto: Ontario Institute for Studies in Education, 1972.

4) "The Objectives of Bilingual Education in Canada from an English-speaking Perspective," in Swain (*op. cit.*).

5) Teaching English to Speakers of Other Languages の略。

で100以上(素点)の点を取ったら、一般的にはその生徒はC以上の学業成績の平均値を取ることができる。したがって、面接で2以上の点、Davis Testで100以上の点、および学業成績の平均値でC以上の成績、これら3つの要素をすべて満たしている者を、評価の基準Iに達しているとする。そして、それを基にして、すべての生徒を英語の熟達度という観点から比較した。

HaleおよびBudarは、次に、特定の学校でNNSE(Non-Native Speakers of English)が英語を母国語としている生徒に対して占める割合、前者の中で上記の評価の基準Iを超えた者の人数等、詳細なデータを示し、具体的な事例を挙げながら、評価の基準に達した生徒と達しなかった生徒の家庭環境、性向等に説明を加えている。この部分の紹介は紙面の制約上、また以下に紹介する内容と重なる部分が多いので、省略することにする。

主として面接から得た情報を基にして書かれた観察記録および所見、それに続く勧告事項は興味深い。それらの中からいくつか抜き出してみることにしよう。

観察記録及び所見

1. 最短の時間で最も高い程度まで英語を使いこなせるようになった生徒は、一般的に次のような事項に当てはまっていた。

a) すべて実際の目的から、彼らは英語およびその文化にとけこんでおり、学校内外で自分の母国語の話者との接触はなく、従って母国語を用いる機会がほとんどないか、あるいはまったくなかった。

b) 教室外では社会的に主に英語の話者とつき合っていた。

c) 彼らの両親の態度は、家で話すのは英語に限る、というものであった。もし両親が英語を話さない場合には、子供同士がお互いに英語で話すように強く要求した。

2. 高い程度にまで英語を使いこなせるようになっていない生徒は、一般的に次のような事項に当てはまる。彼らの中には入国してから数年も経過している者もいる。

a) 英語に触れるのは教室内に限られていた。

b) 社会的な場で母国語を話し、通常英語を話す友達がいなかった。

c) 家では母国語だけを話していた。

d) 英語の映画ではなく母国語の映画を好みとしていた。

3. 先の評価の基準に達した生徒は一般的に、TESOLの特別クラスに出席しなければならないのをひどくいやがった。通常のクラスに出席した方がより益するところが

あり、そうさせてくれるべきだ、というのが彼らの考えであるように思われた。

4. 毎日1時限、2時限、時々3時限もの間TESOLの特別クラスに出席した生徒は、特別クラスに出席しなかった生徒よりも英語の習得においていささかなりとも、より進歩を示した、という証拠はほとんどないように思われた。

5. 6時限まで授業がある日の2ないし3時限をTESOLの特別クラスで過すと、ためになるより害になる方が多いように思われた。このことは、生徒が学校外で英語に触れることがほとんどないか、まったくない場合には、重要なことであろう。英語の話者ではない生徒同士をTESOLのクラスに長時間にわたって一緒にしておくことで、彼らに更に母国語を用いる機会を与えることになった、ということも事実であろう。英語だけをTESOLの教室では話すように教師が強く求めることができるとしても、これは一般的には言うはやすく行なうは難しである。

6. 発音にてこずっている生徒のためになるような特別クラスに出席することに、多くの生徒は興味を示した。しかしながら、おおかたの生徒はこのことに注文をつけ、このようなクラスが通常のカリキュラム内のクラスの妨げとならないように予定を組んでほしいと述べた。

7. 英作文の分野で特別クラスを作る必要があるということには、面接したNNSEおよびTESOLの教師双方で意見が一致した。

勧告事項

調査の結果得られた結論は次のようなものである。すなわち、実際の場で生徒が英語およびその文化に触れることが第一義的な事柄であり、特別のTESOLの課程は第二義的なものである、という結論である。もし移民として入国してきた生徒が、現在自分が住んでいる国の新しい文化に参加しようとしなければ、どれ程長い時間をかけてTESOLの課程をなんとかこなしていくようにさせられようと、彼は非常に高い程度にまで英語を使いこなせるようにはならないであろう。

以下HaleとBudarの提示している勧告事項を列挙しておこう。

1. 移民してきた生徒に学校で英語及びその文化との全面的な接触が持てるようにし、その接触を最大限にすること。正規のTESOLのクラスでの英語の教授を最小限におさえること。

2. 実地見学旅行をひんばんに行なって、生徒にアメリカの文化に触れさせることにより、その文化の価値体

系を自己の一部として身につけられる機会を与えること。この実地見学旅行は、別に用意周到な旅行である必要はない。ガソリンスタンド、スーパーマーケット、近所の商店、銀行、警察署、消防署といったような、アメリカの文化を代表するような場所に掛掛けて行くだけでよいし、さまざまな住宅地域を散歩することでもよいし、あるいは個人の家を訪問することであってもよい。

3. 思春期を過ぎてから外国語を話すことを習う人には、だれでも「外国語なまり」がつきまとうことは、おおいにあり得る。そして、このなまりは決して除去され得ないかもしれない。したがって、教師が性急に過ぎ、ある特定の生徒が「変な話し方をする」という理由で、その子は特別クラスに組み入れられなければならない、といった勧告をしてはならない。われわれがどういう教え方をするかにかかわらず、2年も経たないうちに流暢な英語を身につけるのは例外的な生徒だけであろう。したがって、教えることができないのではないかという恐れのある生徒をほうり込む場所として、TESOLのクラスを使うことは避けなければならない。

4. 通常の学校のカリキュラムの中で、移民として到着したばかりの生徒を、少なくとも最初の学期中は、もの覚えの良くない子供達のクラスに入れるのではなく、能力的に上のクラスに入れること。この意図は、移民してきた生徒をできる良い生徒と学業の面で競争させるといったことではなく、むしろ前者により良い手本に触れさせることにある。つまり、この手本となる生徒は、「より良い」英語を用いる傾向があるであろうし、そればかりでなく、さらにより重要なことであるが、移民してきた生徒の必要としている事柄を敏感に察知してくれる傾向も、より多く持ち合わせているであろうし、新参者をいじめたりあざけったりする傾向はより少ないであろう。

5. より能力的にすぐれた生徒が、1対1のやり方で、特に外国人生徒が入学してきた初期の段階で、その面倒を見る「仲良し」組織を作り上げること。これには、個人的にいろいろ教えたり、学校の構内を案内したり、外国人生徒を友達に紹介したり、その子に新しいゲームを教えたりすることが、含まれていなければならない。

6. 移民として入学してきたばかりの生徒の学業面での負担は、最初の学期の間最少限におさえること。音楽とか美術、工芸とか体育といった、通常の学業には入らない分野でより多くの科目を取らせること。

7. 移民してきた生徒を毎日ランゲージ・ラボラトリーに行かせるようなことをしてはならない。彼らは文字通りランゲージ・ラボラトリーの中で生活しているので

ある。彼らはそれに取り囲まれているのである。つまりラジオ、テレビ、映画、街角とか商店にいる人々に取り囲まれているのである。彼らがそれを利用できるように取り計らってやること。

8. TESOLの初級コースは、新しく移民として入学してきた生徒だけに限ること。そして、こういうクラスは毎日一時限だけに限ること。もしできることなら、通常組まれているクラスと時間的に重ならないように、その予定を組むべきである。生徒は、先に述べた評価の基準Iに達したら、すぐにTESOLのクラスを「卒業」することを認められるべきで、特別クラスをできるだけ早く抜け出て本流に身を投ずる、といった目的が彼らになければならない。

9. 評価の基準Iに達した生徒に、発音および作文の選択科目を与えること。

10. 学校以外の場合で（たとえば、一般社会とか家で）生徒が英語に触れ、それを使用する機会を増やすことができるような方法を検討すること。

最後に、Hale及びBuderは、以上のような勧告事項が他の地域でも適用し得るかどうかにについて述べ、アメリカ本土において見い出されるように、英語を話さない集団の人口が大きくまた集中している場合を考慮に入れてみれば、こういう場合には以上のような勧告事項を実行に移すことは不可能であるかもしれない、と述べている。

わが国では、海外帰国子女で日本語以外の言語を第一言語としてしまっている場合、日本語の習得という面で、上記の勧告事項における「英語」を「日本語」に入れ代えてみれば、かなり活用できる事項があるであろう。また本稿で取り上げた2つの論文に共通していると考えられる主張、つまり「外国語または第二言語の習得に最も重要な要素はそれがコミュニケーションの手段として実際に用いられている場が存在することである。」という主張は、常識的に見て当然のことと思われるが、なお注目に値するであろう。われわれが通常の英語教育の場で、人為的にせよその「実際の場」をいささかなりとも作り出すことは可能であるからである。

(南山大学講師)

〔訂正〕本誌前号(No. 69)「外国語学習開始の時期」に次のような誤りがありましたことをお詫びして訂正いたします。

p. 46 右欄 32行目 理料→理科

p. 47 左欄 27行目 5歳→7歳

Pretensive から Expressive へ

瀬川 俊一

昭和44年('69年)に改訂された中学校学習指導要領に〈言語活動〉が登場して以来、早くも10年が過ぎ去った。「人間尊重・人間性回復のために〈ゆとりのある教育〉を」という基本方針に基づいて、昭和52年('77年)に改訂された今回の中学校学習指導要領では、文型・文法事項・語彙が前回よりも削減されている。精選された言語材料による〈言語活動〉を更に徹底することが強調されている指導要領であると言ってもよいであろう。

外国語を習得する過程はどのような approach・method・technique¹⁾ によるにしても、まず新しい言語材料を理解し、理解したことを練習することにより更に理解を深め、そのようにして習得した知識を場面・状況に応じて運用してゆく過程であると言える。〈理解⇄練習(基礎練習⇄応用練習)→運用〉という過程は〈学習活動から言語活動へ〉という過程であると言いかえられる。

言語学習の過程で言語が実際に使用される状況に近い場面設定で練習を行うことの重要性を否定する人は、先ずいないであろう。そのための指導の一方法として用いられているのが、練習の際に行う role-playing である。言語学習が少しでも実際の言語活動に近い場面で行われるためにも role-playing の果たす役割は大きい。状況設定の表現 "Suppose..." を使って、人・場所・時・物などの situation を変化させて、とかく機械的になりがちな練習を多彩な実際の言語活動に近い練習に変えることが可能だからである。

しかし、教室での言語活動は、教室という人為的な場において行われる活動であるので、manipulationの枠内に留まった言語活動であり、実際の communicationの際の言語活動と同一とは言えない。どのように巧妙に場面・状況の設定をしても、pretending な要素が入ってしまうので、role-playingは優れた technique ではあるが、〈ほんとうの言語活動〉ではない。

Vol. 18, No. 2 (April, 1980)で、Amsterdam Free University講師 C. J. Koster氏は"On Exploiting Native Speakers"の中で、この問題点を指摘している。"situations where the element of pretending is almost wholly absent"に留意して英文科の学生を指導した実践報告であるが言語活動を考える上に真に示唆的である。

用いられた方法は、アムステルダムを訪れる旅行者が遭遇すると思われるあらゆる場合を想定して、それぞれの場面に必要な質問を考えて、それらをまとめあげて、旅行案内所に旅行案内パンフレット等の改善に役立つレポートを書くという方法である。

まず、学生は観光事業とはどういうものか、旅行者が知りたがっていることはどういうことか、何を目的に当地にやって来るのか、等についての調査を行う必要があった。そのため、学生は3グループに分れて、グループ毎に brainstorming を行い、基本的な問題点を論じ、質問事項をつくり、45分後に、グループ毎の報告を行った。実際にインタビューする時に旅行者たちに笑われたりすることのないよう、どこから質問を始めるか、何を目的に質問するのか、等について全員で徹底的に検討が行われた。そのようにして出来あがったリストを market research の専門家に見てもらって決定版とした。

完成したプリントを使って、各学生は少なくとも3人の英語の native speaker と話すことを義務づけられた。質問文は、ほとんどが yes/no type だったので、チェックするのは簡単だったが、そのうち約20%はさまざまな答えが予想される質問だった。

実際の体験に基づいて、どのようにして旅行者に近づいたか、旅行者の反応はどうであったか、等についてレポートを書き、3人の学生が全員のレポートの内容をまとめて最終報告書を作成した。

この報告で注目したいことは、準備の段階から実際のインタビューにいたるまで、学生が明確な問題意識をもって学習に参加していることである。pretending な言語活動ではなくて、学生の意図・意思・感情を言語を使って表現するという真の言語活動が行われているということである。

〈manipulationからcommunicationへ〉の指導は、pretensive (pretending) な言語活動を、expressive な言語活動に転換する方法を案出することにより、より効果的に行えるように思える。(県立静岡女子短期大学助教授)

1) Edward M. Anthony, "Approach, Method, and Technique," in *Teaching English as a Second Language: A Book of Readings*, ed. Harold B. Allen (New York: McGraw-Hill Book Company, 1965), pp. 93-97.



『モザイク社会の女性たち』

深尾凱子・菅原真理子共著

ELEC 出版部, 四六判, 224頁, ¥1,700

吉田 健 正

カナダの女性にとって、昨年は記念すべき年であった。“Persons Case”という有名な裁判で、カナダの女性が persons すなわち“人”として認められ、上院議員に任命される資格を得てからちょうど50年目に当たったのである。

その50年の間に、カナダにおける女性の地位は大きく向上した。国立経済研究所の所長や上院議長、そして外務大臣も、この間まで女性であったし、現在は日本の衆議院に当たる下院の議長が、かつて通信大臣などを歴任したソーベという女性である。何もエライ人ばかりではない。アルバータ州にあるオイルサンド鉱の案内ガイドは中年の女性で、小型バスを運転しながらオイルサンドから合成石油にするまでのむずかしい化学的工工程を説明してくれるし、ジャーナリズムや労働運動で活躍している女性も多い。これは、feminism 思想の高まりもさることながら、広大な国土を開発するには国民すべての能力をフルに利用しなければならないという必要性から、女性にも多くの機会が与えられているからだろう。

本書は、こうしたカナダの女性について、実際にカナダを訪れ、特に女性を対象に取材あるいは調査した2人の著者がまとめたものである。深尾さんが社会的に活躍している著名な女性を、菅原さんが離婚した女性とか一人住まいの女性など、いわば市井の女性を中心に、プロフィール風にまとめている。著者たちはカナダのさまざまな女性たちの意識や生きざまを、同じ女性の立ち場から温かい筆致で紹介しているだけでなく、保育所や“女性のためのよろず悩みごと相談所”，職業紹介所，老人ホームなどを訪れ、また離婚調停やカナダでの女性学，軍隊への女性参加問題，カナダ女性のキャリア・プランニ

ングといった点にも触れて、カナダ女性についてさまざまな角度から論じている。

それだけではない。本書は、標題が示しているように、「モザイク社会」であるカナダについての本でもある。カナダはアメリカ合衆国とそれほど変わらないのではないかと考えられがちだが、良く見ると、両国は明らかにひとつではない。歴史的にも文化的にも、そしてもちろん政治的にも、両国は互いに異なる——ということをやまず認識すべきである。また日本では、カナダというと、「森と湖の国」あるいは「資源の豊かな国」というイメージだけでとらえがちだが、そうした連想からは、そこに人間が住んでいるかどうかさえ定かでない。

本書は、この2つのギャップをみごとに埋めてくれる。カナダ人の特異な対米関係や対米感情，英語系住民とフランス系住民の間の葛藤，インディアン問題，日系人の生活など、カナダのさまざまな局面を分かりやすく説明して、カナダとアメリカ合衆国との違いを浮きぼりにし、また当然ながらカナダにも生活があることを知らせてくれる。

これは、実はなかなか容易な仕事ではない。カナダは、世界のあらゆる文化圏からいろいろな習慣や価値観を携えてきた人々の寄り合い社会だから、いわゆるカナダ的生活様式というものはないし、「典型的な」カナダ人あるいはカナダ女性なんてのもない。アメリカ合衆国の文化的、社会的影響をもろに受けているから、どこまでがアメリカ的なもので、どこからがカナダ的なものか、判別するのもむずかしい。国土の大きさが、カナダを語る仕事をさらに困難にする。

この本は、こうした困難にもかかわらず、カナダの女性を中心にすえながら、カナダないしカナダ人について、かなりうまくまとめている。とり上げた女性の一人一人の紹介がいささか物足りないのと、カナダ女性の社会的地位や役割、あるいはカナダ女性が抱えている悩みや問題について全体的な解説のないのが惜しまれるが、カナダに関する本があまりなく、しかもカナダの女性について書かれた本はおそらくこれが初めてであることを考えれば、こうした欠点はいわば宿題として今後に残しておいてもいいだろう。この本を契機に、カナダについて、またカナダの女性について関心の高まることを期待したい。私たちは、アメリカなどの大国については必要以上に関心を寄せるが、カナダのような“おとなしい”中小国家やその国民のことは、ジャーナリズムもあまりとり上げてくれない。本書は、その意味でも意義がある。

(カナダ大使館勤務)

A Hundred More Things Japanese

edited by H. Murakami and D. Richie
Japan Culture Institute, 1980
215pp., ¥2,500

John G. Bradshaw

As the title plainly implies, *A Hundred More Things Japanese* is the sequel to *A Hundred Things Japanese*. Anyone living in the twentieth century would be thoroughly justified in being suspicious of anything called a sequel, but in this case the sequel is as good as its predecessor. Reading the first book is not a prerequisite for enjoying the second.

This is a collection of short essays of about five hundred words each. They tend to fall into one of two categories: 1) traditional things and ideas, and 2) imported things which, because they have acquired a place in the Japanese scheme of things, have changed and become indisputably Japanese. Topics range from Patrolmen, Personal Advice, and Insect Cages through Wedding Receptions, Drunks, and Morning Glory to Onomatopieia, Farts, and English.

The variety of authors complements the diversity of subjects. These hundred things are seen through the eyes of true observers because none of the authors is a native Japanese. All of the writers have spent some time in Japan, are competent, and judging from their credentials at the end of the book, they all have in some way devoted a great part of their lives making Japan more intelligible to those with less time, experience, and knowledge. Though two-thirds of the

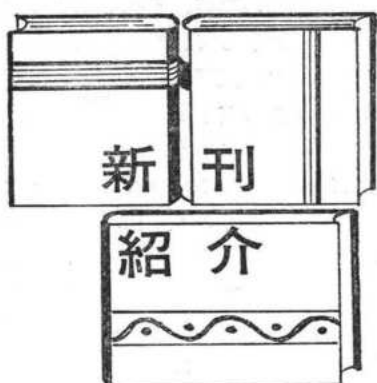
authors are American, the remaining third represents France, Britain, Yugoslavia, the Philippines, Hong Kong, and Australia; thus the observers themselves are looking at Japan from many points of view. The writers describe their subjects using personal experience and historical anecdote; sometimes the tone is intimate, at others it is objective or just sociable.

The book is the embodiment of variety and this is the book's greatest weakness as well as its greatest strength. No one would be satisfied with all of the articles, but then again everyone would find something of interest. The book aims for a college-educated audience interested in Japan; some of the authors aim a little high, other a little low and the result is a bull's eye.

There is one thing which might annoy someone who had paid the \$16.50 listed on the fly leaf: the vast majority of photographs have no captions. In all fairness, in most cases this is minor, but there were times that a photograph would arouse questions on the order of "Where is that place?" "What's its name?" Speculation on the possibility of travelling there was rewarded with nothing under, over, or next to the picture which would reveal the secret of its location. That is to say, it had no caption. There were some beautiful photographs, both color and black-and-white, though the bulk of them were black-and-white. All of the Japanese terms were explained well, except three, which were not explained at all. On the whole, it was a well produced book.

Throughout the entire book there is hardly a breath of anything discouraging about Japan, and in the end almost anyone could say that reading *A Hundred More Things Japanese* had been both pleasant and interesting.

(Instructor, the ELEC Institute)



■『英語のモデル教案集』

英語教育協議会編

1時間の授業の流れをどのように構成したらよいか、指導案作成の時点で何をどう教えたらよいか、研究授業後の合評会などを活発、充実したものにさせるためにはどうしたらよいか、言語活動に効果的に取り組むためには、どのようなことが前提行動として基本的に大切な、など英語教育現場における今日的課題に実践面から答える最良の書であると思う。

誰も指導過程確立の重要性には異論を唱えない。しかしその具体例となると今一つ決定度に欠ける。長年に及ぶ教歴からのカンで把握されることもあるが、それはあくまで偶然の出来事。指導目標を立て、それに迫るための道程は言語学的に正しく構造化されねばならず、この意味で山家保教授の開発になる復習、新教材の導入、音読と内容理解、まとめという指導過程の構造は、その内容・取り扱いにおいて、中学・高校では若干異なるものの、英語の授業はかくあるべき、という実例を随所に見ることができて役立つ。

本書一読、復習が何分、新教材導入が何分という時間制限に批判的な意見もできるかも知れない。もっと余裕を持って時には漫談をと考える向きもあろう。確かに一理あるかも知れない。しかし本当に力をつける授業は、英語についての教授ではなく、英語それ自身の教授に徹することで、英語について語ることにより興味を持たせることではないことに気がつくであろう。忠実に本書を実行することにより、この迷いはふっ切れると信じる。

指導法と評価の関係はいわば車の両輪のようなもので、指導法がよかったかどうかは適切なる評価による。この点を念頭に入れた合評会が意外に少ない昨今、山家教授による「英語の授業のチェックポイント」は大いに参考になろう。オーラル・アプローチを基盤にした授業は勿論、その他の教授法にも利用できるもので、これによりよい授業、よくない授業の正しい評価の目も育成されよう。

「言語活動」という語を聞いて久しいが、最近ようやくその真の姿が認識されはじめ、安易な言語活動への突進は非常に危険だ、というムードになりつつある。当然のことながら、文型練習など基礎的学習活動が前提行動として見直されているが、このことは大変重要なことである。たとえば、文型練習とて万能ではない。しかし文型練習以外の方法でどうやってこれと同等、いやそれ以上の力を学習者につけることが可能であろうか。短絡な批評を下す前に文型練習とは、を再考すべき。その何たるかに本書は無条件に答えてくれることであろう。

最後に本書を特色づけるもう一つの面は、全教案にそれぞれ録音テープがあるということである。授業者の発言、発音は勿論、生徒の学習活動も実に明瞭、逐一聴取できる。実

演授業の興奮が居ながらにして彷彿できるばかりでなく、指導過程の細部がより一層明確に把握されることであろう。

(ELEC出版部刊、A5判、94頁、¥880;

録音テープ全15巻、各巻¥2,000)

(愛知教育大学教授 後田忠勝)

■『快刀乱麻を断つ』

——新・国際人へのすすめ

國弘正雄著

國弘正雄氏の経歴についてはこと改まって紹介するまでもあるまい。ただ、文化人類学者、大学教授、売れっ子のテレビ解説者……といった華々しい経歴に眩惑されて、最近のコマーシャルイズムにうまくのり「知」の商品化、通俗化に一生懸命になっている俗流学者タレント勢と同一視されたのでは國弘氏がかわいそうだ。

國弘氏の経歴の中で見落してならない点は佐藤内閣時代、三木外相の秘書官を引き受けて以来、今日に至るまで一貫して三木氏の外交ブレーンとして現実政治にかかわってきたことである。しかし、そのことをもって氏を一介の御用学者、体制のイデオログと断ずるのはまちがっている。そのわけは自民党における数少ない理念型政治家であり反官僚、党内最左派という三木氏の政治的位置にも関係するが、それにも増して國弘氏のもって生まれた在野性、政治的アマチュアリズム、彼の言葉を借りれば「地下人」の発想にある。

本書の中で國弘氏が終始、厳しく対決しているように「知的生活を営むためには書庫とクーラーを、明治憲法の昔に戻ることこそが日本人の幸せ、と公言してはばからないある売れっ子学者評論家」とは断じて異

なる。

彼らは60年代後半の大学闘争によって、国公立アカデミズムが理論的に破産した、その間隙を縫ってカビのようにはびこった。「大学闘争はみずからの知識を国家目標達成の技術として駆使する新たな専門バカを仕立てあげた」(松本健一氏『転形期の〈知〉』)のである。國弘氏は本書で果敢に彼らとの対決を試みる。

第2に國弘氏が対決しているのは日本の「ベスト・アンド・ブライテスト」たる「エリート官僚」である。ニクソン・ショック、円切り上げで優秀であるべき筈の彼らがいかに、無能ぶりをさらけ出したか、また三木内閣時代、保守本流勢力と組んだエリート官僚群が三木政治の革新的な芽をいかに摘みとるべく暗躍したか。國弘氏は当時を回顧し歯軋りをしながら彼らの「事件の変動に対する対応力の欠落」を撃つ。「インターメスチック」(ウチ、ソトの相互乗り入れ)という、国際的用語化しつつある國弘氏の造語もその歯軋りの中から生まれたのである。

三木氏を通じて現実政治にかかわり、チトー、ブランド、チャウシェスクなど当代一流の政治リーダーと「直接話す機会に恵れたこと」が國弘氏の思想の背骨を鍛え「異文化に橋を架ける、ことを一生の仕事とする自覚」をより確かなものに育てあげた、といってもいい。

生涯を「魯迅」に打ち込んだ竹内好は戦後、多くの人間が訪中するのをみながら「ただ行ったら何も見えないものではない。なぜ見えないか」というと自分に問題がないからだ」と言い、ついに自らは訪中せずに死んだ。「書物の量が即ち〈知〉である」というアメリカ型エスタブリッシュメントとの落差を感じざるを得ない。ただ、彼らが「高等教育」の大衆化現象、雑誌文化の中でハバをきかせ

ている今日、新たな「知の再建」は容易なことではあるまい。

(PHP 研究所刊、四六判、236頁、¥880)

(サンケイ新聞政治部記者 久保紘之)

■『カタカナことば』

——日本に帰化した外国語

深尾凱子著

本来は外国語なのだが、日本語に訳さずに発音をカタカナに置き換えるだけでそのまま日本語化された言葉が私たちの周りにはいっぱいある。昔の女学校を出て、60も中ばを過ぎた私の母親などは、新聞にはわけのわからないカタカナの言葉ばかりが出てくるので、近ごろ読む気がしなくなってきたと言う。本書によるとなんと新聞で使われる言葉の約12%がカタカナ言葉だという。それも10年前の調査でこの数字なのだから、80年の今では確実にもっと増えているのに違いない。

この本はそんなカタカナ言葉が氾濫している現代日本のマスコミの中で、実際に第一線で活躍中の新聞記者が、豊かな外国語の知識を土台におかしな和製外国語を痛くに分析した大変におもしろい現代日本語カタカナことばのハンドブックである。

同じ音で違う意味を持つ「ポスト」のような語の説明とか、「キャスター」のように本来「ニューズキャスター」という語なのだが長すぎるからと言って簡単に「キャスター」とされてしまった例など、101のカタカナことばの例が紹介されている。さらに「コミュニティー」のように日本では地域社会の意味でもっぱら使われている言葉でも、他に広い意味がある言葉の場合などは、きちんとその説明が加えられてある。「ムーディー」「パーソナリティー」の

ように本来の英語の意味とは全く違うコトバになってしまった和製英語の説明など、英語圏の人が聞いたら腹をかかえて笑うような例もある。

外国語をそのままカタカナで表記する理由に、日本に今までなかった事物・概念・考え方の表現に適切な訳語が見つからないためとか、新しい感じを表現するためとか、いくつかの理由があげられているなかに「(外国に対する)食欲なばかりの好奇心と活力」というのがあった。勝手に造語したり、奇をてらい人目をひくためにわざと外国語をそのまま使ったり、あるいは生半可な知識のままいい加減に使われたりされたものでも、いったんマスメディアにのせられたカタカナ言葉はどんどんひとり歩きして行く。

新しい知識に対する食欲なまでの好奇心と活力なしに新しい言葉は生まれにくい。カタカナ言葉は正に日本語の生命力の強さを示すものであろう。日本語のたくましさ、著者の言葉で言えば「日本語の胃腸のたくましさ」を知るために是非一読をすすめたい本である。

(サイマル出版会刊、四六判、255頁、¥980)

(スウェーデン語翻訳家

ヤンソン由実子)

【訂正】本誌前号(No. 69)の *Collins English Dictionary* の新刊書評に次のような誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

p. 51 左欄 定価 ¥5,300

→(インデックス付) ¥6,900,
(並製) ¥5,900

なお、国内での販売は(株)秀文インターナショナル(電話03-949-2551)が取り扱っております。

新刊案内

◆『昭和50年の英語教育』若林俊輔編集，四六判，160頁，1,000円，大修館書店

昭和元年から50年までを5年ごとに区分して，各5年を1人の執筆者が担当する形式をとっている。昭和16年に勃発し国民を戦禍の渦に巻き込んだ第二次世界大戦を中心として激しく変化した社会情勢と共にめまぐるしく展開する英語教育界・教育論を軸に，各時代背景を示す年表とそれに付随する解説はドラマチックでさえある。

執筆者の顔ぶれは，「英学界は少年期から大人の時代へ」〔昭和元年～5年〕高梨健吉，「非常時下の英語教育界」〔昭和6年～10年〕皆川三郎，「大戦前夜の英語教育界」〔昭和11年～15年〕清水貞助，「戦時下の英語教育界」〔昭和16年～20年〕星山三郎，「終戦直後の英語教育界」〔昭和21年～25年〕鳥居次好，「息を吹きかえした英語教育」〔昭和26年～30年〕福井保，「検討・反省期に入る」〔昭和31年～35年〕石井正之助，「英語ブームに沸く中で」〔昭和36～40年〕隈部直光，「学園紛争と英語教育改善への動き」〔昭和41年～45年〕若林俊輔，「新しい展望を求めて」〔昭和46年～50年〕伊村元道の諸氏であり，これらは編者の若林氏がその「まえがき」でも述べているように，「それぞれの5年がそれなりに特徴を示しながら，同時に，その前の5年，その後の5年と，鎖のように連結されている」ことを明示している。

本年までの昭和51年～55年に，英語教育界はどのように変化し，どの方向へと歩みつづけるのであろうか。本書の出版は，英語教育関係者のみならず，多数の人々に英語教育の本質を問い直す機会を与えてくれるものといえよう。

◆『就職のための英語面接』トミー植松著，B6判，306頁，1,200円，玉川大学出版部

国際語としての英語の需要が増加している今日，入社試験に英語による面接をとり入れている会社も多く，巻末付録の「英語面接を行なっている会社」にも100社近くがリスト・アップされている。

本書の構成は，「面接試験の心得」，「必ず聞かれる質問とその答え方」，「諸注意および履歴書等の書き方」，「個人面接・質問とその答え方（基礎篇）」，「応用篇1」，「応用篇2」の6部から成り，外国人と日本人の思考方

法の相違点を踏まえたうえで特に留意すべき点（表現方法，態度），面接試験に際しての自己分析法から服装にいたるまでこと細かに解説されている。特に後半の「個人面接・質問とその答え方」では各々のケースでの質疑の実際が英文と日本語の両方で示されているので，実践力が養えると同時に，日本語と英語の表現方法の相違が如実に示されており興味深い。

◆『フランクリンとアメリカ文学』研究社選書11，渡辺利雄著，B6判，263頁，980円，研究社出版

雷雲に向かって風をあげ，雷と電気とが同じものであることを立証し，避雷針を発明したフランクリンは，科学者として，またアメリカ独立宣言起草委員の一人として，日本でも馴染み深い人物であるが，『フランクリンとアメリカ文学』という本書のタイトルを眼にすると，ふと疑問を感じ興味を覚えるのではないだろうか。

イギリスの歴史評論家トマス・カーライルは，フランクリンの肖像を眺めながら，「ここにすべてのヤンキーの父がいる」と嘆いたといわれているが，本書は典型的アメリカ人フランクリンを通して，アメリカ人あるいはアメリカ文学・文化の特徴と本質とを興味深く解説してくれる。

◆『TOEFL 英語問題の分析と研究』Gregory Stricherz・小笠原林樹共編，B5判，218頁，2,900円，語研

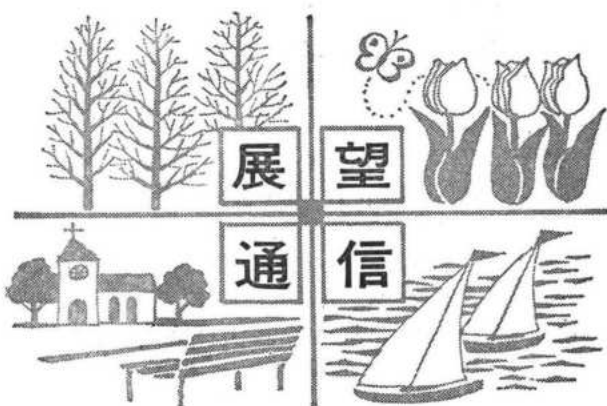
米国の大学への留学希望者が受けなければならない英語の資格試験に TOEFL (Test of English as a Foreign Language) テストがあり，このテストで志望大学の定める以上の点数を取らなければ，留学が認められないことは，今日多くの人々の知るところであるが，さて「受験勉強」にとりかかろうとすると，適切な参考書・問題集がなかなか手に入らないことも事実である。

本書は，TOEFL テストのうち Structure and Written Expression, Reading Comprehension and Vocabulary の2部門に関する練習問題・解答・解説，ならびに TOEFL 全般についての解説を含んだ，まさに「TOEFL を受験する日本人のための「傾向と対策」の書」ともいえる。

◆『英語参考書の誤りを正す』河上道生著，四六判，206頁，1,200円，大修館書店

各種学習・受験用参考書類にしばしばみられる，間違った文法規則，古くなって現在では通用しなくなった規則や語法など，多様な誤りを具体的に指摘し，我が国英語教育の一つの前進を図ろうとする意欲作である。

☆ ☆ ☆



◆1980年 ELEC 夏期英語教育研修会

A. ELEC セミナー (通学制)

期 間 7月28日 (月) — 8月8日 (金)

会 場 ELEC会館 (千代田区神田神保町3—8)

B. 八王子セミナー (合宿制)

期 間 8月16日 (土) — 22日 (金)

会 場 大学セミナーハウス (八王子市下柚木)

問合せ 英語教育協議会 SP係 〒101千代田区神田神保町3—8 電話 03—265—8911

◆イングリッシュ・ギャラクシー

A. 中級・上級の部

期 間 7月26日 (土) — 29日 (火) 3泊4日

B. 入門・初級の部

期 間 8月27日 (水) — 30日 (土) 3泊4日

なお、A. B. 共会場は静岡県御殿場・YMCA研修所 東山荘で、参加費は 39,000円 (宿泊・食事・受講料を含む)。

申込み・問合せ トミー植松語学センター 〒151渋谷区代々木2—23—1 ニュー・ステイト・メナー 1358 電話03—374—5055

◆JALT 語学教育研究国際大会研究発表希望者募集

JALT 語学教育研究国際大会 (JALT International Conference on Language Teaching —1980) が、11月22日、23日、24日に南山短期大学 (名古屋) で開催されるが、そこでの研究発表者を下記により募集している。

- (1) 発表要旨を英文 200語にまとめて2部提出する。
(1部は発表者名記入, 1部は無記名)
- (2) 発表要旨の下に研究発表対象分野を入れる。たとえば, Applied Linguistics, Secondary High School Education, Teaching English Abroad, Teacher Educators, Curriculum Designers, Material Developers, など。

(3) 使用する用具 (黒版, OHP, スライド)

(4) 50—75語の bio-data statement

(5) 送り先 〒466 名古屋市昭和区隼人町19 南山短期大学英語科 Paul G. LaForge

《編集後記》

『英語展望』第70号を世に送り出す。創刊号を出したのは1961年の4月であったから、すでに20年が経ったことになる。一つの雑誌に20年間もおつきあい出来たことは一編集者としてこの上もない幸せなことだったと思う。

既刊の69冊を積み上げてみる。20年間の思い出がそこにはいっぱいある。ひとたび活字になって印刷されたものはもはや消すことが出来ない。赤面するような誤植もちらほらある。予定した原稿が入らず、その穴埋めに一晚で原稿を書き上げて下さった先生方のお名前も何人か見当たる。電話1本で、一夜にして原稿を書いて下さる執筆者がいるということ、これは編集者にとってはかけがえのない財産である。改めて、これら諸先生に厚くお礼申し上げる。

何はともあれ、雑誌編集者として最大の喜びは、読者からの反応である。舞台俳優が客席の反応を何よりも大切にすると共通したところがある。客にこびるわけではない。こちらの真意が読者に通じたかどうかには神経を使うわけである。その意味で第3号 (1961年) で中学校の教科書の広地域統一採択に抗して、一校だけで別の教科書を採用した甲府市黒平町の記事を巻末の小さなコラムに載せたところ、さっそく第4号の巻頭言で岩崎民平先生 (当時東京外語大学長) がそれに触れた記事をお書き下さった。駆け出しの編集者にとってその時の喜びは…今も忘れられない。

前号で初めて編集後記に顔を出された津田塾大学卒の才媛、美光さんが今後この雑誌編集を全面的に担当して下さることになった。女性らしいこまやかさと優しさ、とて紙面が充実されることと思う。これからは一読者として彼女に声援を送りたいと思う。 (Q.Q)

英語展望 (ELEC Bulletin)

第70号

定価 580円 (送料120円)

昭和55年7月1日 発行

◎編集人 朱 牟 田 夏 雄

発行人 酒 井 杏 之 助

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 ^{エレクトラ}ELEC出版部 (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8

電話 (265) 8911 — 8917

振替・東京 3—11798

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC